

(2005.12.21作成。単純な誤植は訂正)

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター」中の

「私の好きな名言・警句の紹介」2005年分一式

年間総目次

5号：2005.2.1

5. 私の好きな名言・警句の紹介（新設コーナー）

(1) 最近知った名言・警句

(2) 医療経済・政策学に少しは関連する有名な名言・警句の誤訳の訂正、出所の探索

6号：2005.2.12

3. 私の好きな名言・警句の紹介（その2）－統計・数字編

7号：2005.3.1

4. 私の好きな名言・警句の紹介（その3）

(1) 最近知った名言・警句

(2) 将来予測のスタンス

8号：2005.4.1

4. 私の好きな名言・警句の紹介（その4）－研究者としての希望・情熱・夢

9号：2005.5.1

3. 私の好きな名言・警句の紹介（その5）－研究課題・問・仮説等

(1) 最近知った名言・警句

(2) 研究課題・問の設定

(3) 仮説の修正

10号：2005.6.1

3. 私の好きな名言・警句の紹介（その6）－医療経済・政策研究者に必要な資質

11号：2005.7.1

4. 私の好きな名言・警句の紹介（その7）－研究者として自戒の言葉等

12号：2005.8.1

4. 私の好きな名言・警句の紹介（その8）－研究者・人間としての矜持

13号：2005.9.2

4. 私の好きな名言・警句の紹介（その9）－研究者と忙しさ、実務・雑用

14号：2005.10.1

7. 私の好きな名言・警句の紹介（その10）－研究者と競争、教育の視点等

15号：2005.11.1

4. 私の好きな名言・警句の紹介（その11）－直感と感性、論争についての自戒

16号：2005.12.1

3. 私の好きな名言・警句の紹介（その12）－最近知った名言・警句

「私の好きな名言・警句の紹介」2005年分 人名索引

注：カッコ内は「ニューズレター」の号数。各行ごとに「ニューズレター」掲載順。外国人は姓のみ（ただし例外あり。例：マザー・テレサ）。映画のセリフは映画名。

あ行

アインシュタイン（5）、内橋克人（5）、落合恵子（7）、大江健三郎（7・16）、上田敏（7）、安藤忠雄（8）、石井志保子（8）、落合信子（9）、A I K I（映画。9）、奥村宏（9）、アイゲン（9）、伊東光晴（10）、エントーベン（10）、浅井基文（11）、ウィットゲンシュタイン（11）、磯部祐三（11）、猪口孝（11）、女ざかり（映画。11）、井上ひさし（12）、大島伸一（12）、石井苗子（12）、猪飼祐實（12）、江夏豊（12）、阿部謹也（13）、梅棹忠夫（13）、梅原猛（13）、エンゲルス（14）、秋元波留夫（14）、秋山耿太郎（14）、小澤秀雄（14）、井村雅代（14）、有馬朗人（15）、五百旗頭（いおきべ）誠（15）、上村令（15）、朝比奈隆（15）、上野千鶴子（15）、尾辻秀久（16）、朝青龍（16）、青木宣親（16）

か行

ケインズ（5・10・11）、ゴッドファーザー（映画。7）、川上武（7・11・11）、グラムシ（7・8・16）、近藤貞雄（8）、権丈善一（9）、カップ（9）、岸本佐和子（9）、小林誠（9）、ガルブレイス（10・14）、工藤晃（11）、熊田亨（11）、近藤勝重（11）、クルツ（12）、桐生悠々（12）、河野栄子（12）、加藤秀俊（13）、加藤周一（13）、玄田有史（14）、岸田國士（14）、黒田玲子（14）、君原健二（14）、ケナン（15）、北村肇（15）、小林美希（15）、桑原武夫（15）、小池民男（16）、衣笠祥雄（16）

さ行

佐久間昭（6）、志井和夫（6・12）、清水祐三（6）、島田豊（7・15）、シラー（8・9）、佐藤藍子（8）、ジェイコブス（9）、白川秀樹（9）、Z（11）、サムエルソン（11）、諏訪邦夫（11）、佐和隆光（11）、下村治（11）、ショー（12）、司馬遼太郎（12・15）、諏訪兼位（13・13）、桜井邦朗（13）、佐藤正明（14）、スワンク（14）、サケット（15）、サルトル（16）

た行

ディズレリー（5）、トインビー（5）、谷岡一郎（6）、豊田泰光（7・13・16）、寺島実郎（7）、ドラッカー（7・16）、高木仁三郎（8）、トリチェツ（9）、玉木明（11）、津山直一（11）、武久みち（12）、西塚恭美（14）、武見太郎（14）、立花隆（15）、タスカ（15）、谷沢永一（15）

な行

難波洋三（6）、中村哲也（7）、中西準子（8）、野茂英雄（9）、中井貴一（11）、野田和夫（12）、中村政則（13）、西江雅之（13）、ナポレオン（13）、中沢正夫（13）、野依良治（14・14）、生江義男（14）、野村克也（14）、野元学二（15）、二木立（15）

は行

東谷暁（5）、藤巻幸夫（5・13）、古田敦也（5・9）、日垣隆（8・11・11）、馬場一雄（8）、ブレヒト（9）、フュックス（10・11）、フリーマン（11）、本田靖春（17）、

ヘーゲル (11)、ホイットワース (11)、フランクリン (11)、橋本響 (12)、細野真宏 (12)、藤倉聡子 (13)、フォーテス (13)、船曳建夫 (13)、パーキンソン (13)、バルビローリ (14)、藤枝克治 (14)、バレンタイン (15)、羽生善治 (15)、パスカル (15)、ボーヴォワール (16)、フジ子・ヘミングウェイ (16)

ま行

マーシャル (5)、マーク・トウェイン (5)、メインランド (6)、三須田健 (6)、丸山博 (6)、三宅隆夫 (8)、マギー司郎 (9)、ミュルダール (9)、マルクス (9・14)、メインランド (9)、益川敏英 (9)、村上宣寛 (11)、丸山健二 (11)、三谷幸喜 (11)、榎原敬之 (12)、森重文 (12)、松山幸雄 (12)、増山元三郎 (13)、虫賀宗博 (14)、マザー・テレサ (14)、松下幸之助 (14)、村上春樹 (15)

や行

湯川秀樹 (5)、柳沢文徳 (6)、吉崎達彦 (7)、米沢富美子 (9)、横山秀夫 (11)、八幡和郎 (11)、山田五郎 (12)、山咲千里 (12)、結城昌治 (13)、山内昌之 (13)、山下泰裕 (14・15)、安田佳生 (14)

ら行

ロビンソン (5)、ロマン・ロラン (7)、ルリア (8)、ロッシュ (10)、ローマー (10)

わ行

渡辺一夫 (7)、渡邊美樹 (11)

5. 私の好きな名言・警句の紹介（新設コーナー）

※ 私は1972年に社会人（病院勤務医）になって以来30年余り、その時々心に響いた名言・警句をB5判カードにコピーまたは転記し、「名言ファイル」に保存しています。その情報源は、新聞記事、雑誌論文・記事、単行本、テレビ番組や諸会議での発言のメモ等、さまざまです。これらは、大学院教育（演習や講義での「イントロ」）にも用いています。本号から、主として最近知った名言・警句を紹介します。これらは私の好みで選び、そのほとんどが「医療経済・政策学関連」ではありませんので、悪しからず。

(1) 最近知った名言・警句

○東谷暁（『日本経済新聞は信用できるか』著者）「<粘り強く根源的に書いていくことができる秘密は？>結局人柄が悪いからかもしれない。裏切られたり、裏切ったり、正しいと思っていたことが間違っていたり、押しつけられてイヤだったことが正しかったり…。そんな経験をしてきたからでしょうね。ほかの方々はみなさん人がよすぎますよ」（「中日新聞」2005年1月30日朝刊）。

○藤巻幸夫（元伊勢丹のカリスマバイヤー。福助社長）「好きになれない人間とつきあう必要がある場合？どんな人間だっていいところは必ずあるはずなので、それを探す。それでも好きになれないなら一生会わない」（「朝日新聞」2005年1月29日朝刊）。

○アインシュタイン「**真実を探求する権利には義務も含まれる。真実と認められたものはその一部たりとも隠してはならない**」（「毎日新聞」2005年1月4日朝刊）。二木コメント『アインシュタインは語る』（林一訳、大月書店、1997、38頁）によると、正しくは、「真実の探求」ではなく「学問の自由」のようです。「私は学問の自由を、真理を探究し、真理だと自分がみなすものを発表し、教える権利と理解いたします。この権利にはある義務がともないます。真理だと自分が認識しているものを一部分でも隠してはなりません。学問の自由が少しでも制限されれば、知識が人々の間に普及することが妨げられ、それによって一国、一国民の判断と行動が邪魔されることは明白です」（緊急市民的自由委員会の会議に向けた声明。1954年3月13日）。ともあれ、私はこの言葉に啓示を受けて（?）、この「ニューズレター」の発行を思いつき、その日（1月4日）のうちに1号を作成しました。

○古田敦也（日本プロ野球選手会会長）「30代のはじめに、おかしいことはおかしいと言わなきゃいけない、自分が正しいと思っていないことに反対もしないで、このまま生きていくこと自体、おかしい話しだと思ったんです。…ある程度の年齢になって、与えられた責任というか、僕が言わなきゃいけないよな、という気持ちは強くなりました」（「朝日」2004年12月18日朝刊）。

(2) 医療経済・政策学に少しは関連する有名な名言・警句の誤訳の訂正、出所の探索

○アルフレッド・マーシャルの正確な言葉は「**冷静な思考力を持ち、しかし温かい心をも兼ね備えた(cool heads but warm hearts)**」("Memorial of Alfred Marshall", Pigou AC (ed), MacMillan, 1925) : 一般には、「[経済学徒に必要なのは]冷静な思考力と温かい心(cool head

and warm heart）」と訳されていますが、原文はand ではなくbutで、しかもhead、heartとも複数形です。昨年11月、YahooUSAでマーシャルの言葉の原文の検索をしていて、and表記とbut表記の両方があることに気づき、権丈善一氏に慶應義塾大学図書館にある原著でbut表記であることを確認していただきました。権丈氏は、「普通に〔経済学の〕訓練をすれば、冷静な頭脳と温かい心情は平行して育たない」ため、マーシャルは意図してbutを使ったと解釈しており、私もそれに賛成です。なお、同氏によると、ケインズはマーシャルの評伝で正しくbutと記載しているにもかかわらず、大野忠男訳『人物評伝 ケインズ全集第10巻』（東洋経済,287頁）では、なぜか「冷静な頭脳と温かい心情」と訳されているそうです。

○ジョン・ロビンソン「経済学を学ぶ目的は、いかに経済学者にだまされないようにするかを習得するためである」の初出：都留重人・伊東光晴訳『マルクス主義経済学の再検討』紀伊国屋書店,1959,37-38頁）。本書は、1955年2月のインド・デリー大学での講演「マルクス・マーシャル・ケインズ」に加筆したものです。

○マーク・トウェイン「嘘には3種類ある。何でもない嘘、しらじらしい嘘(damned lies)、それに統計だ」の初出：C・ナイダー編、勝浦吉雄訳『マーク・トウェイン自伝』筑摩書房,1984,199頁（原著1959）では、マーク・トウェインはこれをイギリスの政治家ディズレーリーの言葉として引用していますが、これは誤りで、正しくは1895年のLeonard H Cortney 卿の言葉だそうです（YahooUSAの複数のサイトで確認。例：

<http://www.phrases.org.uk/meanings/375700.html>,2004.6.2）。**二木コメントー**YahooJapanで検索すると、マーク・トウェインの言葉として、「嘘には3種類ある」の2番目の嘘を「本当のことを黙っている類のウソ」と紹介している方が少なくありません（例：浦島充佳氏、坂本二哉氏、宮川公男氏）。しかし、原文のdamned liesはこうは訳せないと思います。damnedをdammed（dam:感情の流れを抑える、せき止める）と取り違えたための誤訳かもしれません。

○湯川秀樹「真理は常に少数派とともにあり」の初出：これは、高名な経済評論家の内橋克人氏が好んで引用される言葉です（「読売新聞」1998年11月14日朝刊、同氏著『もうひとつの日本は可能だ』光文社,2003,35頁等）。本年1月、私はこれの初出を知りたく思い湯川博士の主な著作を調べましたが分からなかったため、内橋克人氏に直接お伺いしたところ、電話で以下の回答を得ました「この言葉の出所はすぐには分からないが、湯川博士が日常的に語っていたと、博士の直弟子の武谷三男さんから何度も聞かされた。私は若い頃武谷さんの家にしょっちゅう出入りしていた。そのために、私の『幻想の「技術一流国」ニッポン』（プレジデント社,1982）を1984年に新潮文庫に収録したときに、武谷さんが解説を書いてくれて、そこにこの言葉と同趣旨のことも書いている」。

なお、湯川秀樹『天才の世界<愛蔵版>』（小学館,1982）のアインシュタインの章では、聞き手（市川亀久彌氏）が、湯川博士は天才の定義は歴史家のトインビーが『歴史の研究』の中で明確にしたクリエイティブ・マイノリティ（創造的少数派）が「一番いいのではありませんかというお考えでありました」と問いかけたのを肯定して、湯川博士が**「天才というものは、だいたい最初は創造的少数者としてあらわれてくる。しかし、それが多くの場合、やがて少数派ではなくなる。それがふつうなのです」**と発言しています（276,281頁）。ちなみに、トインビーは『歴史の研究』で、「文明の成長は創造的個人または創造的少数者によって成しとげられる事業である」と主張しています（『世界の名著61』中央公論社,1967,205頁）。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年6号）」（2005.2.12）より

3. 私の好きな名言・警句の紹介(その2)ー統計・数字編

○佐久間昭「[統計的]有意症(significantosis)」ー「統計的に有意ということは生物学的、医学的に集団としての体重の増分が有意義だという内容を含まないし、5%で有意よりも1%で有意の方が、体重の増分が大きいのだという直接的な内容も含まない。…体重増分の程度は、推計によって検討され、その解釈は実質科学的な知識をもとに行われるべきである。有意であることは、作業仮説段階での体重の増加の作用機序の統計的な証明と考えることも危険で、たかだか、データは作業機序と矛盾しないという程度であり、その証明は、統計学ではなしに、医学、生物学の固有の問題である。…この辺のsignificance of significantの誤解を症状とする病気を“有意症”significantosisという」（『薬効評価ー計画と解析I』東大出版会,1977,51頁）。二木コメントーこれは佐久間先生（東京医科歯科大学教授・難治疾患研究所臨床薬理学部門）の造語で、先生の十八番でした。30年前と異なり、現在では統計学の基礎知識がなくても、パソコンで統計ソフトを用いて手軽に統計処理できるようになった結果、この病気の罹患者が増加していると思います。次のG I G Oについても同じです。

○「GIGO(garbage in, garbage out)」:「ゴミを入れても、ゴミが出てくるだけ」、元になるデータが悪ければ、いくら精緻な統計処理をしてもマトモな結果は得られないという揶揄。私は、1972年の第12回臨床試験における統計セミナー（日科技連主催）に参加したときに、佐久間昭先生から初めて教えていただきました。別の方からは、G I G Oはgigolo（ジゴロ）のもじりで、[ジーゴ]と発音すると教えられましたが、これは真偽不明です。

この言葉は、私の手持ちの統計学辞典等には掲載されていません（東洋経済新報社版『統計学辞典』1986、新曜社『統計用語事典』1984、朝倉書店版『社会調査ハンドブック』2002等）。谷岡一郎『「社会調査」のウソ』（文春新書,2000,23頁）では、社会調査方法論の世界の言葉として紹介されています。同氏は、この種のゴミを一番出しているのは「学者」と「その予備軍とされる大学院レベルの研究者」と主張されており、私も同感です。

意外なことにこの言葉は、普通の英和辞典には載っていますが、そこではこれはコンピュータ用語であり、しかも「不完全なデータの結果は信頼できない原則」あるいは「入力不正と、出力の情報もやはり不正としないという経験則」であると、上述した意味より狭く説明されています。発音も[ガイゴウ]とのこと。

○D・メインランド「標本の大きさに関してこれ[小標本は統計学者にとっては無意味なものであるという誤解]とは逆の型の批判もまた聞かれる。それは小標本（20ないし30例）からえた統計学者の結論などは、数百例を取り扱う臨床家の経験と比べるととるに足らないものであるという類いである。この種の批判は、“われわれは1000回も同じ誤りをおかし、それを‘臨床経験’と呼んでいるのだ”という臨床家の言葉には注意を払っていないのである」（『医学における統計的推理』東大出版会,1962,138-139頁）。

○志井和夫（日本共産党委員長）「政治家の仕事としては現場第一…質問するにしても（現場の）一人ひとりの顔が頭に浮かんでくるような気持ちでやるのか、それとも現場の実態を統計でしか知らないで質問するのか、これはずいぶん違ってきます」（「しんぶん赤旗」2004年11月28日：FMラジオ番組「永田町カフェ」に出演時の発言）。

○清水佑三「数字にも感情があることを知っている…数字は生きたものの投影、射影である。生きたものの構造を映していない無理な数字の組み合わせは、それを見抜ける目には異様な感じに映る。ヘン、アブナイと直覚する。粉飾はわかるのである。／数字が『痛い、痛い』と泣いている。数字にも感情がある、これがその真意である。それがわかるだけだ」（『数字と人情』PHP新書,2003,98頁）。

○難波洋三（銅鐸鑑定人）「遺跡や遺物に執着し、そこからどれだけ多くの情報をつかみ出すか。まあオタクですよ。でも**数多く見るだけではだめ。感覚が必要です**」（「朝日新聞」1996年12月17日朝刊「ひと」）。

○三須田健「数値の内容は自分の五感で確かめるのが原則である。…孫引きは失敗のもとである。数値についての誤植や錯覚を発見するのは難しいことである。／数値に含まれている情報は、一般にごくわずかなものである。そのわずかな情報が大きな価値を持つのは、既知の科学的・技術的知識に付け加えられるときだけである。いいかえれば、**背景に関して十分な知識と洞察力を備えているものが数字を見れば、わずかな数字から重要な事実を発見できる**のである」（武谷三男編『安全性の考え方』岩波新書,1967,168-169頁）。

○丸山博「衛生統計学は、いつも血と汗でつづられた人生の結晶である」（『公衆衛生（復刻版）』医療図書出版社,1972,152頁）。**二木コメント**—純私的事ですが、この本は私が1972年4月に社会人（病院勤務医）になって最初に読んだ本で、読書ノートを書きながら熟読しました。この本に興味を持ったのは、私の友人の結婚式で、私の母校東京医科歯科大学の柳沢文徳教授（難治疾患研究所疫学部門）が「公衆衛生学の最高の基本文献」と激賞して、「常のこの本に立ち返るように」とその友人にプレゼントしたからです。この本は1950年に三省堂から出版された直後に、GHQによって発禁処分を受けたそうです。私はこの本により、上述した統計学の精神だけでなく、歴史を学ぶことの大事さを知りました。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年7号）」(2005.3.1)より

4. 私の好きな名言・警句の紹介(その3)

(1)最近知った名言・警句

○落合恵子（『母に歌う子守唄』著者）「**私の仕事は社会にある常識のふたを取る**こと。その器の中の憤りや悲しみをちょっとすくって外に出す仕事だという気がしています」（「毎日新聞」2005年2月5日朝刊「ひと」）。

○豊田泰光（野球評論家）「**[70歳になった] 私はますますわがままに生きる方針だが、それがすんなり通るとすれば、69歳までにそういうキャラクターを立てたから**。還暦だ、古希だといって急に態度を変えると、偏屈爺さんといわれたり、急にいい人になって気持ち悪いといって遠ざけられるから要注意だ」（「日本経済新聞」2005年2月17日朝刊「チェンジアップ」）。

○寺島実郎（日本総研理事長）「**[アメリカのやり方は] 液体をヒモでしぼるようなもの**」（CBCテレビ「サンデーモーニング」2005年2月20日ーイラクの暫定国民議会選挙で反米のシーア派政党が勝利したことを評して）。

(2)将来予測のスタンス

○吉崎達彦（『アメリカの論理』の著者）「**俺はブッシュが嫌いだ、などと言った瞬間、アメリカ情勢の予測は当たらなくなる**。もちろん、ブッシュ万歳でもだめ。…当たる予測を書くのが私の仕事で、こうあるべきだ、こうであっては困る、などという前提でものを考えるわけにはいきません」（「中日新聞」2003年6月22日朝刊「著者に聞く」）。

○「**敵を憎むな、判断が狂う**」（映画「ゴッドファーザー・パート3」）。二木コメントーこの言葉は、本年[1991年]春に公開されて話題を呼んだ、巨匠コッポラ監督の映画「ゴッドファーザー・パート3」で、アル・パチーノ演じるニューヨーク・マフィアのゴッドファーザー、マイケル・コルレオーネが、亡き兄の私生児ビンセントを諭して言った言葉です。このビンセントは暴力志向が強く、マイケルの子分がニューヨークの「しま」を奪おうとして、マイケルの暗殺を図ったことに逆上し、すぐに報復しようとするのですが、その時に、マイケルは、ビンセントを制して、この名言を吐くのです。そして、彼は、独自の情報網を使って「敵」の動きをじっくりと把握した後に、慎重に反撃の手はずを整え、最後には「敵」を完膚なきまでに打ちのめしてしまいます。もっとも、その直後には、予期せぬ悲劇が待ちかまえているのですが…。／厚生省を「敵」とみることには異論があるかも知れませんが、私は、厚生省の政策を分析し、それへの対応を考える場合にも、このような冷静な態度が不可欠だと思っています(1991年11月9日の日本医療社会事業協会東海ブロック研修会・講演「90年代の医療と医療ソーシャルワーカー」の「講演にあたって」より、静岡県医療社会事業協会「研修会抄録集」1991,4頁)。

○中村哲也（ゲイサークル「YOUgikai」）「**怒りだけでは思想が乾くー差別される側が差別する側に怒りをぶつけるだけでは、思想が乾いてしまう**。運動内部に権力関係も生まれやすい。生身の人間が生きていく矛盾や本音を抱え込みながら、手を替え品を替え、今までにない表現や運動をつくっていきたい。それがゲイの見せどころ」（『アエラ』1995年1

月16日号39頁)。

○川上武「理論にもとづいた予測は意外と外れて、実感、現実を見てそのフィーリングに基づいて書いたものがむしろ当たっていた。…特定のイデオロギーのみで教条的に予測したことはあまり当たっていない。…ペーパーを読んで論文を書くと、解釈で書いているところが多くなります。解釈で書いたものだけを集めて予測したら、やはり間違ってしまう。しかし、自分で現場で体験したこととペーパーとを結合していけば、比較的間違いはしないだろうという実感をもっていました」(『戦後日本医療史の証言』勁草書房,1998,9-10頁)。

○ドラッカー「すでに起こった未来(the future that has already happened)」：①「ここにおいて重要なことは、社会生態学者(social ecologist)の仕事は、すでに起こってしまった変化を確認することだということである。社会・経済・政治のいずれの世界においても、すでに起こった変化を利用し、機会として使うことが必要である。／重要なことは、『すでに起こった未来』を確保することである。すでに起こってしまい、もはやもう戻る事のない変化、しかも重大な影響力をもつことになる変化でありながら、まだ一般には認識されていない変化を知覚し、かつ分析することである」(上田惇生・他訳『すでにおこった未来—変化を読む眼』(ダイヤモンド社,1994,313-314頁)。②「政治、社会、経済、会社のいずれにもせよ、およそ人間に関わることについては、未来を予想してもあまり意味がない。75年後といわずとも、つい目の前のことについても同じである。／だが、すでに起こり、後戻りのないことであって、10年後、20年後に影響をもたらすことについて知ることには、大いに意味がある。しかも、そのような既に起こった未来を明らかにし、備えることは可能である」(上田惇生訳『P. F. ドラッカー経営論集—すでに始まった21世紀』ダイヤモンド社,1998,5頁)。二木コメント—拙著『保健・医療・福祉複合体』(医学書院,1998,3頁)では、「現在各地に誕生している『保健・医療・福祉複合体』は『すでに起こった未来』(ドラッカー)であ」と位置づけました。

(3)将来展望の視点

○ロマン・ロラン&グラムシ「知性の悲観主義、意思の楽観主義」：これは「ロマン・ロランからグラムシがうけとった言葉です。…ロマン・ロランにしても、グラムシにしても、戦争とファシズムの中で現実を見つめる時に知的にはいつもリアルで、景気づけで楽観論を語ったりしてもしかたがないということをもまず認めます。すごいところは、2人が『意志の』と言ったことです。つまり、**現実**は**絶望的**だけれど、**なんとかしたい**と思うことの裏に**希望**を見ていることです。悲観と楽観の両方をあわせ持った緊張をつうじて、そこから**現状からの活路が探究される**つづけるんだと思います」(島田豊『文化の時代に』椋の木社,1987,69頁)。二木コメント—これは私の勤務先の故島田豊教授の十八番でした(島田先生からは、グラムシ選集該当箇所も教えていただいたのですが、迂闊なことにそれは行方不明になっています)。私は、医療政策の分析・将来予測を行うときにいつもこの言葉を肝に銘じるとともに、勤務先の日本福祉大学で新たな役職につくたびに、この言葉を引用して、自分のスタンスとしてきました。最近では、2003年1月の社会福祉学部長選挙時の公約(「言うべきことを言い、やるべきことをやります」)の冒頭「私のスタンス」で引用しました。

○渡辺一夫(大江健三郎の恩師)「『絶望しすぎず、希望を持ちすぎず』というのが、ル

ネサンスのユマニストの生き方です」（大江健三郎『言い難き嘆きもて』講談社,2001,301頁で、「励ましとカラカイのこもごも感じられる口調」で言われたと紹介）。**二木コメント**—拙著『医療改革と病院』（勁草書房,2004）のあとがきで、「この間の〔医療改革の〕議論を冷静かつ複眼的にふり返り、今後の着実な部分改革の道を考える…際必要な」「醒めた態度」として、この言葉を引用しました。

○上田敏「現実主義的理想主義—理念はあくまで高く掲げつつ、それと現実とのギャップにも眼をつぶらず、そのギャップの大きさに絶望もせず、そのギャップをひとつひとつ埋めていく努力を積み重ねていく、地に足をつけた『現実主義的理想主義』こそが重要なのであり、それによって現実はたとえわずかずつであっても一歩一歩理想に近づいていくのである」（『リハビリテーションを考える』青木書店,1983,44頁）。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年8号）」(2005.4.1)より

4. 私の好きな名言・警句の紹介(その4)ー研究者としての希望・情熱・夢

※人名の次のカッコ内は、発言当時の所属・肩書きです。

○日垣隆「環境工学の永遠のチェレンジャー中西準子さん…を尊敬する第2の理由は、完全に納得するまで、どんなにきつい研究でも止めず、**関係者に説得する希望を捨てないこと**」（『エコノミスト』2004年12月7日号「敢闘言」）。**二木コメント**ー日垣氏が激賞している**中西準子『環境リスク学』（日本評論社,2004）**は私もスゴイ本だと思い、上記「大学院『入院』生のための論文の書き方・研究方法論等の私的推薦図書（2005年度版,ver 7）の「5. 研究・研究者の心構え」で紹介しました。

○高木仁三郎「『本気』を、もう少し分析していくと、**確信と希望ということに尽きる**と思う。理想主義者の私は、核のない社会が必ず実現する（出来れば自分の目の黒いうちに）ことへの強い確信をもっている。さらにそのことのために本気になれば、私自身が少なくとも1人分の貢献ができるだろうことへ、確信と自信をもっている。だから、私はいつも希望をもって生きていられる。先天的な楽天主義者と評されたが、それでよい。**生きる意欲は明日への希望から生まれてくる**。反原発というのは、何かに反対したいという欲求ではなく、よりよく生きたいという意欲と希望の表現である（『市民科学者として生きる』岩波新書,1999,222頁）。**二木コメント**ー私は、本書を読んで、著者の知的正直さと志の高さに圧倒されるとともに、死を目前にしてこれほど前向きに生きられることに「希望」を持ちました。著者は本書を「病院のベッドの上で書」き、出版1年後の2000年10月に亡くなりました。本書も、上記「私的推薦図書」の「5. 研究・研究者の心構え」に入れています。

○グラムシ「**情熱のみが理性を鋭くする**」（哲学者の故芝田進午氏が1976年4月21日に、氏の主催する「マルクス主義研究セミナー」で引用）。

○シラー「**青春の夢に忠実であれ**」（馬場一雄（日本大学教授・小児科学）「青春の夢に忠実であれ」『Clinician』No.336,1984.12から重引：「若い日に夢みた理想や目的を、大切に心にとどめて、妥協せず、絶望もせず、青春の夢に忠実に一生を生き続ける」という心がけは、これから開花期を迎える青年にも強調したいし、すでに人生のたそがれを迎えた筆者自身のいましめとしても適切な言葉であるとおもう）。**二木コメント**ーグラムシとシラーの言葉は、私の最も好きな言葉の1つ（2つ）で、毎年、私のゼミ生・院生等に配布している私の「プロフィール」でも、「研究信条」のトップに引用しています。今回、これらの出典をいろいろ調べましたが、残念ながら分かりませんでした。

○三宅隆夫（医療用マスク国内最大手の創業者）「**ホラと夢は紙一重。その実現に向かって努力しよう**」（「朝日新聞」2003年4月28日朝刊「ひと」ー最近、地元の小学生にこう説いた）。

○近藤貞雄（日本ハム監督）「**言いたい放題言ったことを自分のターゲットにしてそれをきちんとやりとげていく。そうでないと、ほら吹きと言われるだけ**」（NHK「サンデースポーツ」1988年11月6日）。**二木コメント**ー私が30年前（1974年度）に東大病院リハビリテーション部で研修医をしていた頃、上田敏先生から、三宅・近藤両氏のようなやりかた

を、ソ連の神経心理学者ルリアは「**言語の自己統制的役割**」と呼んでいると教えていただきました。

○佐藤藍子（女優）「中山美穂さんにあこがれています。でも自分の目標じゃない。目標を作った途端にマネになっちゃうから」（「朝日新聞」1996年11月1日夕刊）。

○安藤忠雄（東大教授に決まった独学の建築家）「運にも恵まれました。でも運は、夢を持たないと向いてこない。〔東大で〕教えられるのは、それぐらいのことかな」（「朝日新聞」1997年9月26日朝刊「ひと」）。

○石井志保子（東京工業大学助教授。猿橋賞受賞）「考えるのは、電車の中でも家の中でもできる。料理の最中にも頭をひねる。ただ、ひらめくのは、問題を2, 3回夢を見た後。夢の中では解けません、息抜きしているときに突然できる。子どもを寝かしつけていて思いついたこともあります」（「朝日新聞」1995年5月23日朝刊「ひと」）。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年9号）」(2005.5.1)より

3. 私の好きな名言・警句の紹介(その5)―研究課題・問・仮説等

※補足：8号6頁のシラー「青春の夢に忠実であれ」の初出と正確な表現が分かりました。シラーの代表的戯曲「ドン・カルロス」の第4幕21場のポーサ侯爵の次の台詞です。「なにとぞ[カルロス]殿下に、青春の夢を尊ぶ心をお捨て遊ばさぬよう、仰ってくださいませ」（佐藤通次訳、岩波文庫、204頁）。江坂哲也日本福祉大学教授（ドイツ文学）に探していただきました。江坂教授によると、「この言葉はポーサ侯爵が皇太子カルロスに宛てて王妃に託した遺言のようなもの」だが、この言葉は「コンテキストから切り離され、さらに日本語に意識され、『青春の夢に忠実であれ』と、一般化されすぎている」とのことです。

(1)最近知った名言・警句

○古田敦也捕手（プロ野球で通算2000本安打を達成）「[「失敗談を書いた本」の効用を説く] 成功した話しを読んでも、つらい時や迷ったときにどうするか感覚は、養われな
いと思うんです」（「朝日新聞」2005年4月25日朝刊）。

○野茂英雄投手（デビルレイズで今季初勝利）「できれば若い選手と同じように一緒にや
っていきたい。年齢を重ねるにつれ、練習で手を抜けなくなった」（「日本経済新聞」2005
年4月13日朝刊）。

○落合信子「教えるだけが指導じゃない。監督に見られているだけで、選手の張り合いに
なる、そしてうまくなる、と落合[博満監督]は説明してくれた。プロなんだからやる気
はある。そのやる気を同じ方向に向けてチームを一丸にすることが、自分のすべきことだ
と考えている」（「朝日新聞」2005年4月2日朝刊）。

○米沢富美子（慶大名誉教授。ロレアル・ユネスコ女性科学章受賞）「忙しさに追われて
いると、[亡夫・允晴さんから]『最近、勉強していないね。怠けているんじゃないの』
と声がかかった。その一声に、新たな勇気とやる気がわき上がる繰り返しだった」（「読
売新聞」2005年3月10日朝刊「顔」）。

○マギー司郎（お笑い系手品師）「たかが芸だし、人生。だけど雑に生きるということでは
ありません。例えば自殺したいと思う若い人へは、自分を楽にして生きてと伝えたい」
（「しんぶん赤旗」2005年3月10日「休憩室」）。

○Jean-Caude Trichet（ヨーロッパ中央銀行総裁）“I am not an optimist and I am not a
pessimist. I am a realist.” [私は楽観論者でも悲観論者でもない。リアリストだ]（The
Economist March 12,2005,p.70）。

(2)研究課題・問の設定

○「正しい質問には正しい答えが含まれている。迷うのは、問の立て方が間違っているか
からだ」（映画「A I K I」2003年公開。合気柔術の師範・平石の主人公への助言）。

○ミュルダール「答えが与えられる前に問が発せられなければならない。問はいやしくも
われわれの関心の表現であり、それらは根底において価値判断である」（『経済学説と政

治的要素』。権丈善一『再分配政策の政治経済学』慶応義塾大学出版会,2001,141頁より重引)。二木コメントー権丈氏によると、ミュルダールは、1930年代には、経済学説のなかから「あらゆる形而上学的要素を徹底的に切り捨ててしまえば、一団の健全な実証的経済理論が残る」だろうとの期待をいただいていたが、価値前提を排除した社会科学が実践性の乏しいものになると、後に悟ったと、1953年の上掲書の英訳序文で回顧しているそうです(権丈氏上掲書141頁)。<実は私も、1990年に『現代日本医療の実証分析』(医学書院)を書いたときは、「いまわが国の医療経済学に求められているのは、原理論的研究ではなく、医療改革の議論の素材を提供する日本医療の実証的な構造分析だ、と考へ」、同書が「90年代の医療改革のための建設的論争の共通の土俵になることを願っていた(あとがき)。/しかし、1992~1993年にアメリカUCLAに留学して、医療経済学・医療サービス研究の勉強と日米医療の比較研究をする過程で、アメリカにおける「精緻な実証研究…と絶望的な医療改革の間の落差の大きさ」、「医療経済学・医療サービス研究の『爛熟』と…医療制度の「荒廃」との共存」を知って、上記の願いがまったく甘かったことを知った。その結果、「良い医療政策の必要条件は、データ・実証研究ではなく、『良い』価値観・価値判断であること。わが国の場合には、憲法25条に規定された、国民の生存権と国の社会保障義務に常に立ち返って、政策立案すること」だと考えるようになった(『「世界一」の医療費抑制政策を見直す時期』勁草書房,1994)。/そのために、1995年に出版した実証研究書『日本の医療費』(医学書院)では、『現代日本医療の実証分析』と同じく、「政策的な意味合いが明確な実証研究」を心掛けるだけでなく、「研究課題の設定においても、結果の解釈においても、前著以上に自己の価値判断を明示』した(あとがき)。>(拙論「医療経済・政策学の視点からみた21世紀初頭の医療改革」『社会保険旬報』2196号,2004,8頁)。

○マルクス「人間が立ちむかうのはいつも自分が解決できる課題だけである。もしさらに詳しく考察するならば、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、またすくなくともそれができはじめているばあいにかぎって発生するものだ、ということがわかるだろうから」(武田隆夫・他訳『経済学批判(序言)』岩波文庫,14頁)。

○奥村宏「経済の動きを注視し、それに対する評論を行うことは重要。評論が間違ふことを恐れてはならない。その繰り返しの中から理論も生まれる」(『エコノミスト』1994年1月4日号「エコノミストの肖像」)。

○K・W・カップ「重要な問題に対する正確でない解答の方が、重要でないあるいは誤った問題に対する正確な解答よりもはるかに大きな意義がある」(井上義朗「世界の経済学者ーK・ウィリアム・カップ」『エコノミスト』1993年12月14日号99頁より重引)。

○マンフレイト・アイゲン「理論は誤りであるか正しいかのいずれかでしかない。しかし、モデルには第3の可能性がある。正しいけれども無意味かもしれないのだ」(The Physicist's Conception of Nature, 1973.マーク・ブキャナン著、坂本芳久訳『複雑な世界、単純な法則』草思社,2005,93頁より重引)。二木コメントーこれは物理学・自然科学についての警句であり、社会科学では理論が「誤りであるか正しいかのいずれか」とは簡単には判断できません。しかし、そのいずれであるかにかかわらず、「無意味かもしれない」モデルが多いのは自然科学以上と思います。これと似た警句に次のものがあります。「結局『まとめ』は、すでに何かを理解した人が頭の中身を整理する時にだけ有効で、元を理解

していない人がいきなり『まとめ』から入っても、ちっとも身につかない」（岸本佐和子「ベストセラー快読－『[非常識に儲ける人々]が実践する図解成功ノート』」（「朝日新聞」2003年7月13日朝刊）。

(3) 仮説の修正

○メインランド「科学者は仮説を設け、しかる後にそれを打破しようとするが、これに対して非科学的な人々は仮説は設けるが、それを大切に保存しようとする」（柏木力訳『医学統計の基礎』岩波書店,1971,12頁）。

○ジェイコブズ「『われわれが住んでいるのは永久に静止しない惑星の上だ』とハイラムは言った。その創造性、多産性は、**終わりなき修正**を要求してやまない。…楽観的に考えると、世界は富んでいて、われわれの行動を**修正し、修正し、さらに修正する**べく、興味深く建設的な機会を、無限に与えつつある」（香西泰・他訳『経済の本質－自然から学ぶ』日本経済新聞社,2001,115頁）。

○益川敏英（京都大学基礎物理学研究所長）「**一番面白いのは、自分の仕事が間違っていた場合**。そうなれば、新しく何かを考える、という理論屋にとってメシのタネができるでしょう？」、小林誠（文部科学省高エネルギー加速器研究機構教授）「**実験の精度がさらに上がって、説明できない部分がでてくるかどうかに関心があります**。何か事件が起きる、というと変ですが、いつまでも予想の枠内では理論屋の出番がありません」（『アエラ』2001年8月27日号、77頁）。

○白川秀樹（ノーベル化学賞受賞者）「**予期しない実験結果が出たときに対応できるよう、よく観察し、専門以外の分野の知識も蓄えておくのが大事**」（「毎日新聞」2000年10月12日朝刊「余録」より重引）。

○ブレヒト「**知性とは間違いを犯さないことではない。どうしたらその間違いをよいものにするか、即座に判断することである**」（「毎日新聞」2000年10月12日朝刊「余録」より重引）。

参考：社会科学における仮説の意味・設定法・育て方については、以下の本が参考になります（本全体の特徴は、「ニューズレター8号」掲載の「大学院『入院』生のための論文の書き方・研究方法論等の私的推薦図書(2005年度版, ver 7)」を参照して下さい）。

○佐藤郁哉『フィールドワークの技法－問いを育てる、仮説を鍛える』新曜社,2002：第3章「正しい答え」と「適切な問い」…「理論的にも実践的にも意義のある『仮の答え』としての仮説を練り上げていくプロセス」を詳述。

○伊丹敬之『創造的論文の書き方』有斐閣,2001：第2章仮説と証拠を育てる。

○小池和男『聞きとりの作法』東洋経済新報社,2000：1. 2 仮説の設定…聞きとり調査の前の「仮説の設定」の大切さを強調。

○荻谷剛彦『知的複眼思考法』講談社＋α文庫,2002：第3章問いの立てかたと展開のしかた－考える筋道としての〈問い〉。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年10号）」（2005.6.1）より

4. 私の好きな名言・警句の紹介(その6)ー医療経済・政策研究者に必要な資質

○G・ロッシュ（フランスの医療経済学者）「経済学、統計学、あるいは情報科学を医師に教えることは比較的容易である。（中略）／これに反して、他の専門分野の人に医学知識を習得させることは、たとえ最低限の知識でも非常に困難である。実際、このためには患者との接触や臨床経験が、少なくとも7ないし10年は必要である。しかしながら**科学の精神**がなければ医師は科学的な経済学を研究する資格はない。ところが医師はその科学の精神を十分わがものにできないことがよくあり、**単なる臨床家**にすぎず、その関心は個々の症例に限られ、一般化を考える能力がないことが多いのである。（中略）／**医療機関及びその機構の驚くべき発展に合理的に対処しようとするならば、経済的な専門知識をもつ多くの医師が必要になる**」（藤野史朗訳『医療経済学入門』春秋社,1980,29-31頁）。**二木コメント**ー私は25年前にこの本を読んだとき、「単なる臨床家」ではなく「経済的な専門知識を持つ医師が必要」との指摘に啓示を受け、「自分の出番！」と、常勤医を辞めて医療経済学研究者になる決意を一層強めました。

○V・R・フックス「**医療経済学に最近参入した研究者への[5つの]助言**ー①あなたのルーツ[経済学]を忘れるな。②**医療技術と制度についてたくさん学べ**。③ハードに学べ、しかしもっと重要なのはスマートに学ぶこと。④同時期に研究者と政治スタッフの兼業を試みるな[本ニューズレター11号で詳しく紹介予定]、⑤研究者としての[3つの]美德を磨け（拙訳「医療経済学の将来」『医療経済研究』8号,2000,100-102頁）。

○Roemer M「**医療制度のような社会現象の分析は常に研究者の視点に影響される。私は、得られる諸事実がすべてしかも誠実に示されている限り、その解釈が特定の社会的又は倫理的価値判断に基づいている場合にも、これを『偏っている』とみなすべきだとは考えない**」（"National Health System of the World Volume 1," Oxford University Press, 1990,p.ix）。

○J・K・ガルブレイス「**文章修行**ー私はわかりやすい英語で説明できないことはないという強い確信を持っている。**経済学者の論文には難解なものが多いが、これはテーマが難しいからではない。十分に考えたうえで書いていないことに原因がある。あるいは、不十分な考えを悟られまいとしてわざわざ難しく書いているのだ**」（「日本経済新聞」2004年1月14日朝刊「私の履歴書」⑫）。

○伊東光晴「**経済学者というのはコモンセンスがなければだめです。異常な、極端な性格の人間は芸術家としては成功するけれど、社会科学者としてはだめです**」（河合正弘氏との「対談 デフレに有効な政策はありうるか」『世界』2002年5月号,138頁）。**二木コメント**ー私は、「極端な性格」でなくても、コモンセンスの本来の意味である「常識」・「良識」がないと良い研究はできない、そして医療経済学上のコモンセンスを身につけるためにはフックスが助言しているように「**医療技術と制度についてたくさん学べ**」ぶことが不可欠だと思っています。ちなみに、私が知っている範囲で最も非常識な医療経済学研究は、グロスマンモデルを用いて「人口の年齢構成変化が健康ならびに医療支出に与える影響」を検討したシミュレーション分析により、2040年の健康状態（1990年の平均寿命を100とする）がなんと34.08（男の平均寿命だと26.4歳）にまで大幅に悪化すると推計した研究です

(医療科学研究所1998年1月医療経済研究会でのN氏の報告)。私も、グロスマンモデルによる推計で非現実的な数値がでることがあるとは知っていましたが、これには開いた口がふさがらず、思わず「今後わずか50年間で卑弥呼の時代に戻るのですか？」と質問してしまいました。

○Enthoven AC「医療の効率の研究のためには、医学、経済学、心理学、他の社会科学、統計学及び関連する定量的手法のブレンドが必要である」("Theory and Practice of Managed Competition in Health Care Finance," North-Holland, 1988,p.21)。

○ケインズ「経済学の大家はもろもろの資質のまれなる組み合わせを持ち合わせていなければならない…。(中略)彼は、ある程度まで、数学者で、歴史家で、政治家で、哲学者でなければならない。[以下、延々と続くが略]」(大野忠男訳『ケインズ全集 第10巻 人物評伝(第14章アルフレッド・マーシャル)』東洋経済,1980,232-233頁)。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年11号）」（2005.7.1）より

4. 私の好きな名言・警句の紹介(その7)ー研究者として自戒の言葉等

(0)最近知った名言・警句

○浅井基文（外交官、明治学院大学教授を経て、広島市立広島平和研究所長に就任）「**私たちが悲観した時こそ本当の敗北なのです**」（「朝日新聞」2005年6月22日朝刊「ひと」）。

○モーガン・フリーマン（米国の俳優。「ミリオンダラー・ベイビー」で本年度の米アカデミー助演男優賞）「（聞き手が「最も偉大な俳優の1人」と言ったときの反応。「今さら照れくさいのですか？それとも人の評価はあまり気にしない、ということ？」と聞かれ）**そんなことはない。褒められればいい気持ちにはなるさ。鵜呑みにはしないけどね（笑）**」（『エコノミスト』2005年6月14日号「ワインドインタビュー問答有用」44頁）。

○Z「**自分が世の中を変えている錯覚に陥る編集者がいる。精力的に取材し、情報を持つほどにそういう勘違いをしてしまうのかもしれない。不遜であってはならない**」（『介護保険情報』2005年6月号「Anchor [編集後記に相当]」86頁）。

○渡邊美樹（ワタミ社長。居酒屋で培ったノウハウで、介護事業に参入）「（いっそ政治家になって変えようとは？）**僕が常に意識しているのは、自分の『存在対効果』なんです。人間として生まれたからには、多くのいい影響を社会に与えたい。政治家になっても、いま僕が持っている影響力は絶対、持てないですよ。でも、明日、総理大臣にさせてもらえるんだったら、考えるかも知れません（笑）**」（「朝日新聞」2005年5月28日朝刊）。

○村上宣寛「**パワーポイントなどは使わない。証拠隠滅型電気紙芝居は嫌いだ。大量のプリントを配布する**」（『「心理テスト」はウソでした』日経BP社,2005年4月,158頁）。**二木コメントー私も同じ流儀です。サムエルソンのガルブレイス批判をもじれば、「学会に籍をおくものの多くは、パワーポイントがきれいすぎることに [原文は文章がうますぎること] は一種の犯罪ー重罪でないまでもーであると考えられる。つまり、美しいパワーポイント [同、名文] でもって自分の考えの重要性をその真正の価値以上にふくらませてしまうというわけである**」（中村達也『ガルブレイスを読む』岩波書店,1988,320頁より重引）。**もともと、医学分野と異なり、社会科学分野では、活字を詰め込んだだけのお粗末なパワーポイントがほとんどです。ちなみに、1枚のパワーポイント（スライド）に盛り込む字数は、「日本字では横15字、縦8行程度が限度」です（諏訪邦夫『発表の技法』講談社ブルーバックス,1995,61頁）。**

○本田靖春「**私には世俗的な成功より、内なる言論の自由を守りきることの方が重要であった。でも、私は気の弱い人間である。いささかでも強くなるために、このとき自分に課した禁止事項がある。それは、欲を持つな、ということであった。欲の第一に挙げられるのが、金銭欲であろう。それに次ぐのが出世欲ということになるろうか。それと背中合わせに名誉欲というものがある。これらの欲を持つとき、人間はおかしくなる。いっそそういうものを断ってしまえば、怖いものなしになるのではないか**」（『我、拗ね者として生涯を閉ず』講談社,2005年2月,572頁）。

(1)自己を限定すること

○フュックス「**〔医療経済学研究者への助言〕同時期に研究者と政治スタッフの兼業を試みるな**—政治スタッフ(player)とは、党派的、政治的過程に積極的に参加している人を指す。研究者は、**何事も恐れることなく、好き嫌いも抜きにして、物事の理解を深めようと努めている人**である。両方の役割とも社会的に重要であるし、同一人物が時期を違えて両方の役割を果たすこともできる。しかし、**同時期に有能な政治スタッフと一流の研究者を兼務することは不可能である。政治スタッフ、研究者として成功するための共通の要素も少しはあるが、二つの役割を果たすために必要な能力と美德は異なっている**」（拙訳「医療経済学の将来」『医療経済研究』8号,2000,101頁）。**二木コメント**—私は、今から約10年前（1995～1996年）、介護保険論争に批判的立場から積極的に参加していたときに、

「同時期に研究者と政治スタッフの兼業」に近いことを行って、大失敗をしかったことがあります。当時、私は、厚生省や老人保健福祉審議会の公式文書が発表されるたびに、間髪を入れずに批判論文を執筆・発表していたのですが、ある時、原稿を入稿した直後に、厚生省の発表データを読み違えて自分の立論を組み立てていることに気づき、校正時にあわてて訂正して、ことなきを得たのです。しかもこれは単なるケアレスミスではなく、厚生省を批判しようとするあまり、無意識のうちに、自分に都合のよいように数字を「誤読」していたためでした。これ以来私は、政策批判論文を書くときには、今まで以上に、「熱く」ならないように自戒し、しかも自己の事実認識と価値判断の区別を徹底するようになりました。

○ウィトゲンシュタイン「**語りえぬものについては、沈黙せねばならない**」（野矢茂樹訳『論理哲学論考』岩波文庫,149頁）。**二木コメント**—この言葉を知ったのは比較的最近ですが、私の研究の出発点は統計を用いた実証研究であったためもあり、若い頃から無意識のうちにこれを実行していました。31歳時に出版した最初の著書（川上武・二木立編著『日本医療の経済学』大月書店,1978）の書評でも、「統計資料などに密着したことは、批判を浮き上がらないものにするのに役立つが、ときには、資料が揃っている範囲までで、議論が止まっている場合も、なくはない」と書かれたことがあります（「朝日新聞」1978年11月5日朝刊）。

○ヘーゲル「**何か偉大なことをしようとする者は、ゲーテが言っているように、自己を限定することを知らなければならない。これに反して、何でもしたがる者は、実は何も欲しないのであり、また何もなしとげない**」（松村一人訳『小論理学』岩波文庫、上242頁）。**二木コメント**—私は、研修医1年目の1973年1～2月に『小論理学』を読んだとき以来、これを座右銘の1つにしており、『複眼でみる90年代の医療』（勁草書房,1991）のあとがき（230頁）でも引用したことがあります。ただし、この時はうる覚えで、不正確に引用してしまいました。

(2) 自信過剰の戒め

○横山秀夫「**『よく知っている分野にこそ落とし穴がある』**というのは物を書くうえでの常識である」（「直木賞選考への疑問」『毎日新聞』2003年5月1日夕刊）。

○ラルフ・ホイットワース（多くの不祥事企業の会長に就任し立て直した実績を持つ）「**強さから来る自信がごう慢に代わる瞬間を見逃してはならない**」（篠原洋一「地球回覧」『日本経済新聞』2002年11月2日朝刊より重引）。

○**玉木明**「自戒をこめていうのだが、**自分が正しいと確信をもって何かを主張しているときほど、自分の限界、弱点をさらしている**と知るべし」（「異議あり！」『エコノミスト』1997年8月26日号）。

○**磯部祐三**「人間はプライドを持っているし、それは絶対に必要だけれども、今までとは違う分野に行ったときには**「プライドを捨てるというプライド」**が必要ではないか」（『会社人間のボランティア奮戦記』文藝春秋,1992.佐高信「筆刀直評」『エコノミスト』1992年10月6日号,109頁より重引）。

二木コメント—これらは（公開）論争をしているときに、特に自戒すべきと思います。

(3)理論過信・屁理屈の戒め

○**佐和隆光**「**事実は理論を倒せない**—いかなる『理論』であれ、データによって完全にくつがえされてしまうことはありえない、つまり『事実は理論を倒せない』のだとすれば、『理論』の命運を決めるのは何なのか。…端的にその答えをいうと、それは社会通念もしくは『理念』の変遷のいたすところである」（『経済学における保守とリベラル』岩波書店,1988,199頁）。「社会科学の場合、たえず複数の理論が共存している。**どの眼鏡をかけるのか、すなわちどのアприオリな理論を通してみるのかによって、事実そのものの姿形が違って見える**」（『資本主義の再定義』岩波書店,1995,10-11頁）。「近代経済学の理論がタテマエとしての反証可能性をそなえていることは確かである。しかし、近代経済学の理論が、正真正銘の『反証可能性』をそなえているのかということ、必ずしもそうではない。…**経済データの『反証』能力はきわめて乏しいのである。いいかえれば、データにより許容される(反証されない)理論はあまりにも多い**」（『これからの経済学』岩波新書,1991,4頁）。

○**晩年の下村治評**「**理路整然と間違える**」（「下村治氏死去、実証分析で高成長を説く」『日本経済新聞』1989年6月30日朝刊）。**二木コメント**—これは元々は、株式相場の格言のようです。YahooJapanで検索すると、「相場とは理路整然と間違えるもの」等の格言が4件ヒットしました。これは、「ニューズレター」7号（6頁）で紹介した、川上武先生の以下の述懐と同義と思います。「**理論にもとづいた予測は意外と外れて、実感、現実を見てそのフィーリングに基づいて書いたものがむしろ当たっていた**」。

○**ケインズ**「未知の行路を踏みわけていく本書のような書物の著者は、もし過度の誤りを避けようとするなら、批判と話し合いをとくに頼りにするものである。**人間はあまりに長くひとりでものを考えていると、一時的にはどんなに馬鹿げたことでも信じてしまう**ものである。人間の考えを形式的または実験的にはっきりと検証することがしばしば不可能である経済学（他の道徳科学と並んで）においては、とくにそうである」（塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』序、東洋経済、p.xxiii）。**二木コメント**—私は、学部のゼミ生や大学院生が卒業論文、修士・博士論文の草稿を私に提出する前に必ず、ゼミ生や院生どおしで草稿を読み批判しあう「ピアレビュー」をさせ、しかもその経過と結果を、草稿の最初に、本文とは区別して、書くように命じています。これの直接の目的は私の添削を効率的に行うためでしたが、ケインズのこの言葉を知ってからは、ピアレビューは、ゼミ生や院生が「ひとりでものを考えて…馬鹿げたことでも信じてしまう」のを予防する上でも非常に有効であることに気づきました。

○フランクリン「理性のある動物、人間とは、まことに都合のいいものである。したいと思うことなら何にだって理由を見つけることも、理屈をつけることもできるのだから」（松本慎一・西川正身訳『フランクリン自伝』岩波文庫,58頁。二木コメント—この言葉の官僚版に、八幡和郎（国土省参事官）「幸か不幸か官僚はどんなことにも理屈をつけるという『技術』を持っている」があります（『官僚の論理』講談社,1995,91頁）。

(4)とにかく「書くこと」

○猪口孝（『現代日本政治の基層』著者）「デカルトのもじりですが、『我書く、ゆえに我あり』。それが学者です。時空を超えて真理を探究し、読者が元気になるようなものを書かなければならない。ただ、それが、とても難しいことなんです（笑い）」（「毎日新聞」2002年5月6日朝刊）。

○日垣隆「取材は『書く』ことなしには完結しない。書くという行為は、自己を相対化し、他者の目で見るということである。究極的には、おのれを知る終わりなき仮説の旅だと思う」（『エコノミスト』2001年11月16日号「敢闘言」）。

○丸山健二「文章は文学のための道具、すなわち技術だ。磨かないとだめになるから、毎日、欠かさず書く。ただし、筆が荒れるので、エッセーは書かない。対談にもテレビにもでない。連載小説も書かない」（『AERA』2005年8月25日号,75頁「表紙の人」）。二木コメント—私は、研究者にとって、「筆が荒れる…エッセー」に相当するのが解説（概説）論文や教科書（の分担執筆）だと思っています。最低限実証研究については、まずキチンと原著論文を書き、その上でそのサワリを解説論文等で紹介・普及すべきです。せっかく良いデータを持っていても、原著論文を書かないまま、解説論文等でそのサワリを紹介するだけでお茶を濁していると、「筆が荒れる」（論理展開が甘くなる）と思います。

○工藤晃（日本共産党経済政策委員長）「書くこともたたかいだ—最近の経済情勢、総選挙を目のまえにした時期と、私にとってきびしい情勢ですが、『書くこともたたかいだ』と思いなおしながら、この本をまとめました」（『日本経済の進路』新日本出版社,1976,はしがき）。二木コメント—私は1990年にある医療運動団体で講演をしたときに、この言葉を借用しました。「私は、国民生活の他の分野と同じく、医療の分野でも、運動・戦い…が改革の推進力であると思っています」と明言した上で、「医療改革のための、3つの広義の『運動』」として、①「伝統的な、国民・患者・医療従事者の狭義の『医療運動』 [医療・社会保障改善運動]」、②「医療従事者自身による『改革モデル』や民主的効率化の探究・提示」、③「研究者による医療の『効果』・『効率』等の実証的研究」をあげ、③も戦いだとして、この言葉を引用しました（拙著『90年代の医療』勁草書房,1990,30-39頁）。

(5)言葉・表現についての自戒

○熊田亨（中日新聞欧州駐在客員）「『言葉の力』とは言葉を舞い踊らせることではなくて、事実へ肉薄する勇気であり、分析であり、未来への構想を組み立てる論理です」（日本記者クラブ賞受賞記念パーティーでのあいさつ。「中日新聞」2000年5月29日朝刊「中日春秋」）。

○「ペンは剣より強しと言うけど、あまり振り回すと、自分に返ってきますよ」（映画「女

ざかり」1994年。女性社主の主人公への忠告）。

○近藤勝重（『サンデー毎日』編集長）「正直に語るということー要は、**そのままの感情表現ではなく、洗練された言葉でいかに正直に語るか**、ということでしょう」（『サンデー毎日』1994年6月12日号156頁）。

○川上武「唯物論的に書け」。ニ木コメントー私は研修医1年目（1972年）に、川上先生の指導を受けながら、論文「医療基本法」（川上武・中川米造編『医療保障』日本評論社,1973所収）を書いていたときに、先生からこの姿勢を徹底的にたたき込まれました。それにより、学生運動の経験を通して染みついてついていた「観念的に書く」（言葉を上滑りさせる）癖が矯正されました。

(6)先行研究の検討を怠らない

○津山直一（東大医学部教授）「無知な者ほどたくさん**の発見をする**」。ニ木コメントーこれは、若手研究者が、先行研究の検討をキチンと行わずに、わずかな経験に基づいて新しいことを発見したと錯覚しがちなのを戒めた言葉です。今から30年以上前（1974年）に私が東大病院リハビリテーション部研修医だった頃に、当時リハビリテーション部長・整形外科教授だった先生が、いつも皮肉混じりにおっしゃっていました。私も、大学院生の論文指導時に、この名言を借用しています。なお、先生は本年2月5日、心筋梗塞で急逝され、江藤文夫氏（日本リハビリテーション医学会理事長）が心のこもった追悼文を書かれています（『リハビリテーション医学』42巻4号,2005,238頁）。

(7)講演をしすぎて金銭感覚を失わない

○日垣隆「原稿用紙を埋めてなんぼの仕事より、**タレント業なり講演業なり大学教授の収入が上回ってしまうと、きっと何かが弛緩してしまう**のだろう。…講演1時間で50万円以上を一度でも入れてしまうと、1枚1万円以下で原稿を書くとき何かが弛緩するだろうとは想像がつく」（「敢闘言」『エコノミスト』1996年1月9日号）。ニ木コメントー私も1992～1993年のアメリカ留学後に講演料の「相場」があがった時に、精神が「弛緩する」危険に気づき、自分の内部で緊張感を維持するために、これ以降現在に至るまで、講演料は全額、福祉団体や運動団体等に寄付することにしました。

(7)その他

○中井貴一（俳優。『日記』著者）「食うには困らないだろうし、それなりに生きていける。でも『**それなり**』になるために『**俳優**』になったのか。**挑戦しなければ俳優としても、人間としても飛躍がない**と思った」（「日本経済新聞」2004年2月29日朝刊「あとがきのあと」）。ニ木コメントー私は、「俳優」は「研究者」にそのまま置き換えかかると思っています。しかし、大学教員になったとたん「それなり」の生活に安住し、研究業績が激減する方が少なくないのが現実です。

○三谷幸喜（脚本家）「大学時代からの友人たちはみんな『今の自分』と『なりたかった自分』の間のギャップを抱えている。**僕は、やりたいことを好きにやらせてもらってここまで来た。もっとがんばらないとバチが当たるという気がする**」（『アエラ』2003年3月17日号,96頁）。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年12号）」（2005.8.1）より

4. 私の好きな名言・警句の紹介(その8)ー研究者・人間としての矜持

○ジェシー・ド・ラ・クルツ（農業労働者）「私たちの国には、**希望は最後に死ぬ（Hope dies last）**、という言い方があります。希望を失ってはならない。希望を失ったら、すべてが失われてしまうということなのです」（スタッズ・ターケル著、井上一馬訳『希望ー行動する人々』文春文庫,2005,18頁）。

○橋本響（ピアニスト）「**自分の音楽に対して『嫌い』と言われるのは、むしろ大歓迎だ。『よくわからない』と敬遠されるより、好きか嫌いかを判断してもらえる音楽家でありたいと思っている**」（『AERA』2005年7月25日号,81頁）。

○細野真宏（『細野真宏の世界一わかりやすい株の本』著者）「**キーワードは『思考の歩幅』です**。マスコミの人は優秀だから、その『歩幅』が長く、いわば階段を1段飛ばし、2段飛ばしで上がって行くような説明をする。だから普通の人がついていけない。私は普通の人と同じ『歩幅』で考えるから、どこで理解がつまづくのかよく分かる。／さらに言えば、『思考の歩幅』の長い人は、**世間的には『理解の速い優秀な人』**なのですが、**実はその説明にはしばしば論理の飛躍やごまかしがある**。本人たちはそれに気づいていないことが多く、それが説明の分かりにくさにつながってしまいます。」（『エコノミスト』2005年7月12号56頁「著者インタビュー」）。

○井上ひさし「**謝罪するのは、自分のなかに正義を取り戻すためです。他人のためではなく、自分のために謝るんです**。それができるかどうか、その国の器量が問われる」（「しんぶん赤旗日曜版」2005年7月10日号「シリーズ戦後60年」）。

○大島伸一（国立長寿医療センター総長。学園紛争世代）「当時 [学生時代] 『医局講座制こそ諸悪の根源』と言っていた連中が今、大学の教授クラスになり、その構造を支えている。私など『世渡りがうまい』と思われているかもしれないけれど、今でも気持ちの上では何も変わっていません。**これはおかしいということはいい続け、改革をやり続ける。そうしないと、本当の裏切り者になってしまいますから**」（『日本醫事新報』4235号82頁「ヒト」）。

(1)言うべきことは言う

○桐生悠々「**私は言いたいことを言っているのではない**。（中略）言わねばならないことを、国民として、特に、この非常に際して、しかも国家の将来に対して、真正なる愛国者の一人として、同時に人類として**言わねばならないことを言っているのだ**。／言いたいことを、出放題に言っていれば、愉快に相違ない。だが、言わねばならないことを言うのは、愉快ではなく、苦痛である。**言いたいことをいうのは、権利の行使であるに反して、言わねばならないことを言うのは、義務の履行だからである**」（鎌田慧『反骨のジャーナリスト』岩波新書,2002,115頁より重引）。

○志井和夫（日本共産党委員長）「**一致点を探ることと同時に、言うべきことは言っておかなければならない**。しかも、それぞれに対し、公平に、ひとしく言おうと。…**大事な場面できちんと態度表明をし、働きかけてきた**。それがいまに生きている」（「しんぶん赤

旗」2003年1月1日「志井委員長の新春ざっくばらん」）。

○山田五郎「大人には、憎まれ役を買って出る勇気も必要だ」（「山田五郎の久しぶりの正論①—憎まれ役が、感謝される日」『翼の王国』2000年5月号）。

○バーナード・ショー（米CNNテレビアンカーマン）「私の役割は事実を伝えること。人に好かれ、愛され、敬われることではない。それがとても孤独な人生だとしても、その道を選んだなら受け入れなければいけない」（「朝日新聞」1993年4月6日朝刊「ひと」）。

○野田和夫（多摩大学学長）「周りの評価ですか。敵だらけですよ、たぶん…。でもね、出る杭は打たれるというが、打たれていると気づき始めたのが40代。50代になって、杭も出続ければ（相手は）諦めると思うようになった」（『週刊朝日』1990年8月10日号）。

二木コメント—私が医学部卒業直後に就職した東京・代々木病院では、先輩医師が冗談半分で、「出る杭は抜かれる」と言っていました（医局や病院の問題点を指摘すると、すぐに、それを改善するための委員等に「抜擢」されるという意味）。

(2)前を向いて生きる

○石井苗子（テレビキャスター・女優）「やっぱり現役であることが大事で、昔はよかったと思ったら辞めるときですね」（「日本経済新聞」1994年3月16日朝刊「ひと時」。二木コメント—これは、私の好きな槇原敬之作詞・作曲「どんなときも」（1991年）の以下の歌詞と共通すると思います。「♪もしも他の誰かを／知らずに傷つけても／絶対ゆずれない／夢が僕にはあるよ／“昔は良かったね”と／いつも口にしながら／生きて行くのは／本当に嫌だから…♪」。

○武久みち（三越事件の被告。元「女帝」）「[それまで裁判のことにすべてを費やしてしまったけれど] 過去のことばかり見ていたら、人間がアンティークになっちゃう。やはり前を向いていこうと思いました」（『週刊朝日』1989年12月8日号102頁）。

(3)決断・選択の美学

○森重文（京都大学数理解析研究所教授）「だれでも最後の決断は、その選択が有利か不利かではなく、好きか嫌いかでしょう」（「読売新聞」2002年6月2日朝刊「友よ—東海高校」）。

○河野栄子（リクルート次期社長）「[副社長から社長に] なりたかったわけではない。でも迷ったら、しんどい方を選ぶことにしています」（「朝日新聞」2003年3月7日朝刊「ひと」）。

○猪飼祐實（ラジオ大阪プロデューサー。高校野球で江夏投手とバッテリーを組んだ）の江夏豊（投手）評「好き嫌いがはっきりしていた。とりわけ、上のものにへつらう奴を極端に嫌った。好きか嫌いかはあっても損か得かはない」（後藤正治『牙—江夏豊とその時代』講談社,2002,40頁）。

(3)その他

○山咲千里（女優）「[「財界人と一晩300万円の援助交際」と書かれても、それに反論しない理由を聞かれて] ケンカしてほしいんでしょ？もちろん戦うことも必要だけど、相手にすると、相手のレベルと同じになっちゃうでしょ。だからほっとくの。それによって私を嫌いな人も出てくるとは思いますけど、そのことを私自身が恐れなことが戦いじゃない

かな」（『週刊朝日』1996年12月6日号「マリコの言わせてゴメン！ [林真理子vs 山咲千里] 50頁）。

○松山幸雄（朝日新聞論説顧問）「私の見るところ、米国人の好きなのは『**志ある合理主義者**』（司馬遼太郎氏が山本権兵衛－日露戦争の時の海軍大臣－を評した言葉）である。

それに豊かな個性と勇気が加われば申し分ない」（「朝日新聞」1991年11月10日朝刊「国際羅針盤－分かりやすい政治を」）。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年13号）」（2005.9.2）より

4. 私の好きな名言・警句の紹介(その9)―研究者と忙しさ、実務・雑用

(0)最近知った名言・警句

○藤巻幸夫（I Y G生活デザイン研究所社長）「こうみえてフジマキ、一発逆転ホームランで人生の巻き返しを狙うような生き方は好きじゃない。コツコツと単打を重ね、いつのまにか目標達成に近づいていくことが、人生だと考えるからだ。（中略）その際に、肝心なのは、高い志を持ち続けること。フジマキの目標は、昔から日本中をおしゃれにすることだった。それもアメリカやヨーロッパから、まねされるくらいに（「朝日新聞」2005年7月30日朝刊b4）。**二木コメント**―私が日本福祉大学に赴任した20年前は、経済学部の若手教員に「研究の目的はグランドセオリーをうち立てることだ」と豪語している方が少なくありませんでした。しかし彼らの研究業績は貧弱だったため、私が「そんなホームラン狙いばかりしていると、三振が続いて、試合に出られなくなるよ。それよりも、ヒットを積み重ねてコツコツ点をあげた方がよい」と批判したところ、「志が低い」と顰蹙を買いました。ちなみに、私は、『医療経済学』（医学書院,1985）から『日本の医療費』（医学書院,1995）まで、臨床医から日本福祉大学教員に転職した10年間に出版したすべての単著（8冊）のあとがきに意識的に「志」という言葉を書き込みました。それらは、次の3つのいずれかです：①医療改革の志（2回）、②医療経済学の本格的研究の志（4回）、③政策的意味合いが明確な実証研究の志（2回）。

○故増山元三郎（推測統計学者。本年7月3日死去）「**自分の一生を参考にして人生を考えてもらえればよい**」（「朝日新聞」2005年8月8日夕刊「惜別」。死の前夜までしっかりした意識で語っていた言葉）。**二木コメント**―私も大学院生等に、優れた研究者の研究方法を「まねる」のではなく、「参考にする」ように指導しています。増山氏のもう1つの名言は「**ただいたずらに莫大な数量的資料を集めるのは意味がない**」で、これは本「ニューズレター」6号（10頁）で紹介したG I G O（「ゴミを入れても、ゴミが出てくるだけ」）に通じると思います。

○藤倉聡子「**騎手の力が3割、馬の力が7割と言われる競馬の世界**」（「毎日新聞」2005年7月14日朝刊。福永祐一騎手の「ひと」欄の地の文）。**二木コメント**―加藤秀俊氏も、名著『取材学―探究の技法』（中公新書,1975,5-9頁）の本文冒頭で、京都の板前さんの「包丁の腕もだいじだが、**材料七分、腕三分**、といったところでしょうな」という言葉を紹介して、「学問とか、知的探究とか、あるいは、物を書くとかいったしごとについても同じことがいえる」と書いています。これらも、上記G I G Oに通じる名言と思います。

○加藤周一「**2つの社会の比較から結論できるのは、その相違であって、どちらか一方の社会の特殊性ではない。特殊性を結論するためには、3つ以上の社会を比較することが必要である。**」（『加藤周一著作集7 近代日本の文明史的位置』平凡社,1979,あとがき,466頁。中村政則『戦後史』（岩波新書,2005,110頁）が、「加藤周一は…**比較は2つよりも3つがよい**と述べている」と紹介）。**二木コメント**―私は、医療分野の「2つの社会の比較」でもっとも不毛なのは日米医療比較だと考えており、その理由は以下の通りです。「医療（政策）に関しては、ヨーロッパが『世界標準』であり、日米は逆方向の両極端に位置す

る。そのために、単純な日米比較は、両国の特殊性を過度に強調することになり、有害無益である」（拙著『「世界一」の医療費抑制政策を見直す時期』勁草書房,1994,215頁）。

○マイヤー・フォーテス（アフリカ研究の泰斗）「書くことだけがお前を助ける」（船曳建夫『大学のエスノグラフィティ』有斐閣,2005,42頁。著者がケンブリッジ大学に留学して博士論文を書いていた時に受けた助言）。

(1) 忙しさ

○諏訪兼位（日本福祉大学学長・当時）「人間は忙しいときに良い仕事ができると、私は信じております」（2003年2月20日の大学評議会での発言）。

○西江雅之（文化人類学者）「不思議なくらい、どこの人間も忙しい。…大切なのは、忙しいか暇かではなくて、充実しているかどうかではないでしょうか」（「朝日新聞」1999年10月31日朝刊「天声人語」より重引）。

○阿部謹也（歴史学者）「多忙？ 学者は忙しいと思った瞬間ダメになる」（「朝日新聞」1999年12月17日夕刊）。

○桜井邦朗「研究者にとっては、時間がいくらあっても、これで十分ということは絶対はない」（『大学教授』地人書館,1991,17頁）。二木立一この言葉は、私にとっての啓示になりました。当時、病院勤務医から大学教授に転身してまだ日が浅かったため（といっても7年目ですが）、私はことあるごとに、「労働者諸君」（寅さんの決まり文句）に比べての研究者の「ひまさ」を強調していました。しかしこの本を読んで、これは誤りであり、両者で忙しさの質が違うことに気づくとともに、「時間を十分にかけた研究をしなければ研究者とは言えない」と、肝に銘じました。

○「忙しいのは分かっている。暇なものも分かっているがね」（結城昌治『修羅の匂い』文藝春秋,1990,188頁。主人公の流木が大横弁護士へ）。

○C・N・パーキンソン「仕事というものは、時間があれば、どんどん膨張していくものである。一般にもこのことがよく知られているのは、“ひまな人ほど忙しい”(It's the busiest man who has time to spare.) ということわざのようになったことばがあることでもわかる」

（外山滋比古『ユーモアのレッスン』中公新書,2003,171頁より重引。原語は、"Parkinson's Law" Penguin Classics,p.14）。二木コメントゴチック部分は森永晴彦訳『パーキンソンの法則』至誠堂（1961,9頁）では、「ひまつぶしはいちばん忙しい仕事である」と訳されていますが、外山氏の訳の方が、原著のニュアンスを正確に伝えていると思います。パーキンソンがここで例としてあげているのは、有閑の老婦人が、忙しい人だったらすぐでできることを、1日仕事にしてしまうことです。これと対と言えるのが、日本でも「ことわざのようになったことば」である「**（大変な、急を要する）仕事は忙しい人に頼め**」です。なお、安島新『ひとまわりでっかいリーダーになる法』（こう書房,1991,112頁）によると、ナポレオンは「何かをさせようと思ったら、一番忙しい奴にやらせろ。それが事を的確にすませる方法だ」と言ったそうです（ただし、出所が示されておらず、真偽不明）。

○中沢正夫（精神科医）「**ストレスは悪玉なのではない…ストレスを1つ1つ乗り越えることが、『人間』の発達**なのである。ストレスは元来、避けるべき対象ではなく、乗り越えるべき対象なのである。一切のストレスを回避すれば、それは楽であろうが、その人は成長もまたあきらめることになるのである」（『ストレス善玉論』情報センター出版

局,1987,25頁)。二木コメント同書のもうひとつの名言は、「私の『正常な心』の定義は簡単である。『矛盾した考えや感情が同居できること』である」(158頁)と思います。

(2)実務・雑用

○梅棹忠夫「**実務的能力**…事務的能力はないが研究はすぐれているというのが、ある時代には、超俗的な学者のイメージとして尊重されたことがあった。現代ではしかし、そういうポーズをとって、事務的な仕事を回避しても、他人は勝手なわがままとおもうだけである。自分の研究能力を楯にして『雑用』を免除してもらおうというかんがえは、いかにもあまい。いわゆる『雑用』ができないというのは、今日においては、**研究能力がないというにひとしい。／研究とは、今日においてひとつの実務である。**たしか実務能力がなければ、とうてい研究などという高級な仕事をこなすことはできないはずである」(梅棹忠夫『研究経営論』岩波書店,1989,191-192頁)。

○豊田泰光(野球評論家)「**楽しもうという気持ちさえあれば、雑役すら意味を持ちうる**」(「日本経済新聞」2005年1月20日朝刊「チェンジアップ」)。

○梅原猛「**管理職生活と研究者生活との二重生活は私にとってむしろ有利に働いた。**なぜなら研究一筋に生きていとスランプに陥ることがあるが、二重生活をしているとスランプに陥る暇もない。管理職として実務を務めていると、また新しい構想が湧いてきて、研究も進む。管理職も、いつ辞めてもよいと思っていると、地位に対する執着がなく、組織の状況が客観的に見られ、判断を誤らない」(「日本経済新聞」2001年5月26日朝刊「私の履歴書」)。二木コメントこれの前半は、私にとってまだ実現できていない目標です。

○諏訪兼位(日本福祉大学情報社会科学部長・当時)「**教授会が実質的であるためには、参加者が出席し、発言し、人の意見をききながら、密度の高い時間を共有することが、肝要です。**…原則的に月1回の教授会に出席すれば、学内・学部内の情報がかなり得られるということが皆さんに認識されて参りましたので、出席率はとても良いのです」(1998年4月7日付の私への私信)。

○山内昌之「**一見すると、どんなにつまらなく見える会議や集まりでも、それを運営したり、支える人たちがいます。**かれらの仕事を否定しかねないことは避けるべきです」(『「反」読書法』講談社現代新書,1997,67頁)。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年14号）」（2005.10.1）より

6. 私の好きな名言・警句の紹介(その10)ー研究者と競争、教育の視点等

(0)最近知った名言・警句

○玄田有史（東京大学社会科学研究所助教授）：「失望の意味ーたしかに、希望の多くは実現しない。その意味では、希望は、多くの人にとって失望に終わるものだ。（中略）／しかし、希望を持ってその後に断念を経験することで、はじめて実感する自分と社会との関係もある。今まで自分が望んでいたことが、自分の実力からは困難だと感じた場合、一定のショックを受けながらも、そこから調整や軌道修正を行っていく。そんなプロセスを繰り返すなかで、自分にとって真に充実感の得られる仕事に出会えるのではないだろうか。希望は、実現することだけに意味があるのではなく、むしろ、それが創り出す修正や調整のプロセスにこそ意味があるのだ」（「若者の挫折は『希望』が救う」『エコノミスト』2005年9月20日号,71頁）。二木コメントー玄田氏の指摘は、若者の「仕事」だけでなく、「研究」、「人生」、「社会（改革）運動」にもそのまま当てはまると思います。私自身も、9月11日の衆議院選挙での小泉自民党の地滑りの圧勝にすっかり失望しているときに、この言葉を読んで、少し癒される（？）とともに、次の古典的名言を思い出しました。「時々労働者が勝つことがあるが、ほんの一時的にすぎない。かれらの闘争の本当の成果は、その直接の成功ではなくして、労働者のますます拡がっていく団結である」（マルクス、エンゲルス著。大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波文庫,51-52頁）。

○秋元波留夫（21世紀も闘う精神科医。『99歳精神科医の挑戦』岩波書店、を出版）「暗い時代への逆行を懸念 ても悲観することないー（中略）戦前よりは今の方がいいと思いつつ、暗い時代に逆行するきな臭さも感じる。批判力を持たない若者にも不満だ。その一方で地域の障害者を献身的に助ける若者を見ると『そう悲観ばかりすることもない』と思う」（「毎日新聞」2005年9月17日朝刊「ひと」。『 』以外は、インタビューに基づく紀平重成記者の文）。

○秋山耿太郎（朝日新聞社社長）「新聞記者というのは志の産業で、誇りで成り立っていますが、その誇りの部分が失われているのではないかと感じています」（「朝日新聞」2005年9月8日朝刊。朝日新聞記者による虚偽のメモに基づく選挙報道問題でのおわび会見）。二木コメントー本「ニューズレター」の拙論1の最後に行った「日本経済新聞と朝日新聞が『老若比率』で誤報」や「ニューズレター」6号（7頁）で書いた「読売新聞の誤報」等から、私は、最近では新聞記者の志・誇りだけでなく、取材能力・事実の判断能力も相当低下していると感じています。ただし、この「新聞記者」は、残念ながら研究者・大学教員にもそのまま置き換えられるし、私自身も常に自戒しなければならない、とも思っています。

○虫賀宗博（京都の出版社「論楽社」代表）「自殺したくなったら図書館へ行こう」（「毎日新聞」2005年6月6日朝刊「余録」より重引。心が沈んでいる友人たちに会うと言っている言葉）。二木コメントー私も、代々木病院の勤務医だった20～30代前半頃、スランプになったときなどに、勤務先の近くの慶應義塾大学医学部図書館に行き、膨大な蔵書やたくさんの学術雑誌を眺めて（≠読んで）、「こんなに知の集積」があるんだ！とや

る気を奮い起こしていました。現在でも、気力のない時には、大学図書館に行って新着の洋雑誌をチェックして、気分転換しています。

○佐藤正明（『ザ・ハウス・オブ・トヨタ』著者）『[豊田] 佐吉はもちろん、[豊田] 喜一郎にも会ったことはありませんが、彼らを直接知っている石田退三、豊田英二、花井正八といった人たちから、取材の合間に話を聞くことができた。当時は雑談だと思っただけ、今になって貴重な話しになったわけです』（『エコノミスト』2005年9月6日号,60頁,「著者インタビュー」）。二木コメントー正規のインタビュー前後のちょっとした「雑談」のときに、なにげなく相手の本音などを聞き出すのは、面接・訪問調査の大事な技法です。

○マザー・テレサ「私たちの行いは大海の一滴にすぎない。でも、何もしなければその一滴も失われる」（映画「マザー・テレサ」。「日本経済新聞」2005年8月22日夕刊の長坂敏久「シネマ万華鏡ーマザー・テレサ」）。二木コメントー私はこの言葉をこの映画評で初めて知りましたが、マザー・テレサのもっとも有名な言葉の1つようです（原語：We ourselves feel that we are doing just a drop in the ocean. But the ocean would be less because of that missing drop.米国のYahooで検索。ただし、マザー・テレサのいつ、どこでの発言かは不明）。これとそっくりで、しかもはるかに古い日本人の名言に、岸田國士「一人では何もできぬ。然し、先づ一人が始めなければならぬ」があります（『泉』角川文庫,1951,258,276頁。「朝日新聞」1939年10月～1940年3月連載）。私はこの名言を高校1年生の時にみた映画「われ一粒の麦なれど」（1964年公開。監督松山善三、主演小林桂樹）で知り、私の「人生訓」の1つにしました。この映画は、一本の間違い電話を受けたことがきっかけで、ポリオ撲滅運動の先頭に立った記者（上田哲NHK労組委員長がモデルといわれている）を描いた秀作で、Yahooで検索すると315件もヒットしましたが、残念ながらこの名言に触れたものはありませんでした。

(1)研究者と競争

○西塚恭美（神戸大学長）「だれでも考えることをやっているから競争になる。独創的な研究には競争はない。学問に競争という言葉はなじまないと思う」（「朝日新聞」1995年3月16日朝刊「ひと」）。

○黒田玲子（東大教養学部教授）「だいたい競争は意識しない。しいていえば『怠けたくなる気分との闘い』」（『朝日新聞』1993年5月18日朝刊「ひと」）。

○野依良治（名大教授。ノーベル化学賞受賞）ある講演で「20世紀は競争の時代。21世紀は協調がキーワードになる」と自説を展開した。これに対し、参加者から「協調が大切と言われるが、日本の研究者は協調的すぎて、独創性が足りないのではないか」との質問が出て、こう答えた。「それは協調とはいわない。依存なんです。（協調するには）個の確立が一番大事です」>（瀬川至朗「発信箱ー野依教授の汎神論」「毎日新聞」2002年3月4朝刊より）。

○小澤秀雄（米特許訴訟で連戦連勝の医療機器メーカー社長）「一貫して戦ったお陰で、外国企業に『あそこ争ってもムダだ』と思わせることができた。…連戦連勝の秘けつは『トップが責任を持つ』ことだ」（「毎日新聞」2003年4月22日朝刊「ひと」）。

(2)教育の視点、教育者としての自戒の言葉

○松下幸之助「『長所だけを見る』人使い—人格の立派な人が、いつも仕事が出来るとは限らんのや。人間誰しも欠点はある。キミ [山下俊彦] は、その欠点だけに気を取られているから、ええところが見えんのや。君なあ、悪いところばかりみると少しは良いところをみるとあかん。／**短所を直す努力をするよりも、同じ努力をするなら長所を伸ばせ。**同じ努力をするなら、いっそう長所を伸ばして、それによって短所をカバーする方が効率が良い」（立石泰則『復讐する神話』文藝春秋,1988,106-107頁より重引）。

○ヒラリー・スワンク（米国の俳優。「ミリオンダラー・ベイビー」で本年度の米アカデミー主演女優賞）「彼（クリント・イーストウッド監督）は、私なんかにも絶対に声を荒らげたりしない。迷ったときには『あなたの本能に従いなさい』と言ってくれる。しかも、**私が自分で考えたつもりでも実はいつのまにかちゃんと導いてくれている。**こんな監督、他にはいませんよ」（「朝日新聞」2005年6月1日夕刊）。

○井村雅代（シンクロ指導者）「『叱る』という育て方 [のいくつかの原則] —叱ったあとに必要なのは必ずフォロー。（中略）叱ることとそれを直すアドバイスは一体でなければならぬ。／**叱るタイミングも必要**です。大事なのは**その場で叱ること**。後回しにするとどんなに叱られてもその理由を忘れてしまう。生々しい感触が残っている時でないとな効果はありません。しかもしつこくない。昔のことは絶対に引き合いに出しません。（中略）／そして**性格によって叱り方のさじ加減**をします。プライドのある子はちょっといっただけで敏感に意図を感じ取る。（中略）逆に根性がすわっているずぶとい子にはボロクソに言います。（中略）『大嫌いだけど、このコーチについてきて良かった』と最後には思わせたい、といつも考えています」（「日本経済新聞」2003年10月14日夕刊「死んでも合わかさな」）。

○J・K・ガルブレイス「教育が服さざるをえない厳しい原則がある…それは、学生が何を学ぶべきかを学生の意志に任すことはできないという原則です。学生が何を勉強するか、しないかの選択を、学生の意志に任せっぱなしにすることはできません。**教育というのは、ある程度までは、訓練課程**だと思うのです。（中略）私は、**自由だけでなく、訓練・規律というものを強調**するような役回りになりましたよ」（岸本重陳訳『実際性の時代』小学館,1991,92頁）。

○野依良治「自分と同じ研究をするな。どうせやっても、ぼくを追い越すことはできない」（「朝日新聞」2001年10月18日朝刊。弟子や学生にはそんな表現で、独自の研究領域を切り開くよう指導した）。

○君原健二（マラソン選手）「『人生はマラソンだ』という言い方に対して、日本の著名なマラソン・ランナー君原健二氏は次のように言う。『人生は駅伝だ』と。**前の世代からバトンを引き継ぎ、他者の中で生き、後の世代にバトンを引き継ぎ、倒れていく**」（藤村正之「生を輝かせるもの」『書齋の窓』2000年9月号,25頁より重引）。

○バルビローリ（天才チェリストジャクリーヌ・デュ・プレと競演した指揮者）「**若い時は過激な方がいい。でないと年を取る価値がなくなる**」（『AERA』1998年5月4-11日号,6頁「甦る尾崎豊」）。**二木コメント**—私はこの名言を大学院の演習で紹介しました。演習に出席していたある院生が祖母で現役バリバリの社会福祉法人理事長にそれを伝えたところ、「年をとっても過激な方がいい。でないと年をとった価値がない」と言い返されたそうです！

○生江義男（桐朋学園理事長）「教育熱心、大いにけっこう。しかしそれだけでは、必ずマンネリズムに陥る。それを防ぎ、つねに教育に新しい伊吹をそそぐためには、教育の仕事とならんで、自分自身の研究課題をもつことが大切である」（「日本経済新聞」1988年12月17日朝刊「私の履歴書」）。

○山下泰裕（柔道家）「指導者としての自分の人間性を磨きたい。実績で人は集まるけど、それからの指導となると人間性がなければ選手はついてこない」（「朝日新聞」1988年1月11日朝刊「[衣笠祥雄（プロ野球解説者）との] スポーツ新春対談」）。

(3)後継者・人材の育成と発掘

○藤枝克治「中内[功]氏は、跡を継ぐ者が『自分より経営の能力や情報が上になったらいつでも辞める』と言っていた。（中略）結局、自分を越えるまで待っていたのでは、後継者は育たない」（『エコノミスト』2004年11月2日号「編集部から」,98頁）。

○野村克也（シダックス監督）「有能な選手とたまたま出会い、その選手がチームの中核に座ることはある。だが、エースや四番を“促成栽培”することは基本的に不可能。育てられるのは枝葉となる選手で、幹となる選手は簡単に育成できないのだ」（「日本経済新聞」2005年6月28日朝刊「私の履歴書」）。

○安田佳生「人材は育たない—亀が歩くのが遅いからといって腹を立てる人がいるだろうか。頭の悪い人に『頭を使え』というのは、亀に『走れ』と言っているのと同じことだ」（『Wedge』2004年8月号,34頁）。

○武見太郎「人材はいるが掘りだされていない。ほこりがたまっていると、竹の子もマツタケもわからない」（『社会保険旬報』1380号,1981年12月21日,20頁「武見日医会長が再度引退表明」）。

参考：私が毎年学生・院生向けに作成している「プロフィール」に書いている**私の教育信条**は、以下の3つです。

①人権・人間の尊厳は平等だが能力は不平等（の人間観に立って、各人の能力を最大限伸ばす。特にレポートの添削指導を徹底）。

②来る者拒まず去る者追わず（ベタベタした付き合いはしない）。

※ただし、誘われたコンパ（一次会）は（パトロンとして?）「皆出席」。

③形式第一、内容第二（規律には厳しいが、思想や私生活には干渉しない）。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年15号）」（2005.11.1）より
4. 私の好きな名言・警句の紹介(その11)一直感と感性、論争についての自戒

(0)最近知った名言・警句

○有馬朗人（物理学者・俳人）「失敗はいろいろあるが、最大のものは、研究以外の色々な事をやり過ぎたことだ。（中略）日ごろ若い人に忠告しているのは、いくつかのことに取り組むのはいいけれど、どれか一つに焦点を合わせるべきである、もっと一芸に徹するべきであるということだ」（「日本経済新聞」2005年10月24日朝刊「私の苦笑い」）。

○ボビー・バレンタイン（31年ぶりのパ・リーグ優勝に導いたロッテ監督）の「ボビー・マジック」をある選手が評して「選手に能力以上のものを要求しないこと」（「毎日新聞」2005年10月18日朝刊「ひと」）。
ニ木コメント 私も、「人権・人間の尊厳は平等だが能力は不平等の人間観に立って、各人の能力を最大限に伸ばす」ことを、「教育信条」の1つにしています（「ニューズレター」14号23頁参照）。

○G・F・ケナン（アメリカの冷戦戦略の構築者）「敵と似た者となるな」（五百旗頭真神戸大学教授「時代の風—テロとの戦いと米国」「毎日新聞」2005年10月9日朝刊より重引）。
ニ木コメント—これは、ケナンがソ連との冷戦時に、米国社会を論じた言葉だそうで、五百旗頭氏は結びで、「他国の粗暴を見るにつけ、自らの高き品位に自信を深め、『敵と似た者となるな』と言い交わそうではないか」と呼びかけています。私はこれは、（粗暴な相手と）論争する場合にも、常に自戒すべき言葉だと思います。実は私は元柔道部（現日本福祉大学柔道部顧問）で、「フェアプレイ」をモットーにしています。

○山下泰裕（国際柔道連盟教育理事）「ぼくはね、未来を見つめて、いまをひたむきに生きるのが好きなんですよ」（「しんぶん赤旗日曜版」2005年10月23日号「ロス五輪金メダル秘話」）。
ニ木コメント—私が一番好きな山下選手の名言は、「男の勝負に言い訳はいらない」（『現代』1984年10月号の同名インタビュー,148～154頁）です。ただし、先日、この「ニューズレター」読者の大学院の教え子から、「未来とか、希望にこだわるのは、団塊の世代の特徴ではないですか？」と冷やかされました。

○野元学二（38歳で年収3000万円の弁護士を辞めて役者になった）「好きだからとしか言いようがない。自分の胸によく聞いてみたら本当にやりたいことがあったんです。気がつくのに少し時間がかかったけれど」（「朝日新聞」2005年10月2日朝刊「ひと」）。
ニ木コメント—私も37歳で、まったく同じ気持ちから常勤医（リハビリテーション医）を辞めて大学教員になりました。

○村上春樹（作家。最新刊は『東京奇譚集』。56歳）「以前は、失敗しても次があると考えていた。50歳を超えると、カウントダウンに入って、あといくつ書けるかな、と考えてくる。無駄なものは書きたくない。今あるものを出し切って、深みのあるものを書きたい。掘り下げる場所も、変わってくるのは当然でしょう」（「朝日新聞」2005年10月3日月曜夕刊「村上春樹が語る 上」）。
ニ木コメント—立花隆氏も54歳時に、知的好奇心について同じような発言をしています。「寿命ということだけを考えると僕も80いくつまで生きるのかも知れないけれど、頭が非常にクリアで、自分の満足できる知的レベルの活動を続けていける状態は、あと何年保てるかわからない。（中略）いずれにしても、残り時間が少な

くなったという自覚が…そうですね、50過ぎてからかなりはっきりと出てきました。そうになると、やはり時間が残っているうちに、もっともっと知っておきたいという欲求が、若いときにも増してすごく強くなっているわけです」（『ぼくはこんな本を読んできた』文藝春秋,1995,18頁）。

OD・L・サケット他「HARLOT (How to Achieve positive Results without actually Lying to Overcome the Truth : 真実をごまかすためにうそをつかずに良い結果を出す方法)」

(HARLOT plc. British Medical Journal 327:1442-1445,2003。浜六郎氏が「日本の医学医療と薬害」『科学』2005年5月号:563頁で紹介)。二木コメントーこれは、「医薬品試験データのクリーニング請負会社(data laundry)ともいふべき架空の会社」(浜氏)についてのパロディです。私は、統計を扱う研究者、特に本人が「真実」と信じている仮説を証明したいと願っている研究者は、たとえ善意からにせよ、無意識のうちにHARLOTを用いてしまう危険があることを常に自覚すべきと思います。

(1)研究者と直感・感性

○羽生善治(将棋棋士) : 「直感の7割は正しい(中略)直感力は、それまでにいろいろ経験し、培ってきたことが脳の無意識の領域に詰まっております、それが浮かび上がってくるものだ。まったく偶然に、何も無いところからパッと思い浮かぶものではない」(『決断力』角川One テーマ21,2005,58頁)。二木コメントー言うまでもなく、これは直感一般ではなく、「プロの」直感です。

○北村肇(毎日新聞記者) 「『直感』を正しく働かせるためには、『情報』の蓄積、あるいは『知識』が欠かせない」(『新聞記事が「わかる」技術』講談社現代新書,2003,19頁)

○上村令(徳間書店の児童書の編集者) 「[ベストセラー出版は「プロの勤が働いたんですね」と問われて] 勤ではありません。地道な情報収集です」(「朝日新聞」1996年9月9日朝刊「舞台裏」)。

○小林美希「大学時代、ある新聞社の編集局長は言った。『新米記者時代、森永ヒ素ミルク事件を追っていた。担当医に“被害者は何%いたか”と聞いたら、“人の痛みを数字(%)で聞くような記者には教えない”と言われ、ハッとした』—それからは、身近にある私憤を公憤に導くような取材を心がけたという」(『エコノミスト』2005年3月22日号,106頁「編集部から」)。

○ピーター・タスカ(金融証券アナリスト) 「努力でアイデア生まれない(中略)高度成長時代には努力・我慢・ガンバルというインプットが評価された。今やアイデアのほうが大事で、これは努力では作れない。企業外の異なる業界の人や文化との接触が知識を深め、アイデアを産み出す。狭いグループ内では知的疲労もたまるんじゃないですか」(「朝日新聞」2000年8月9日朝刊「私のバカンス論」)。

○朝比奈隆(指揮者。当時90歳。故人) 「[現役指揮者の] 目標は95歳。それまで感情を老化させないようにしたい。なんとかいけそうな気がしているんですよ」(「読売新聞」1998年12月15日「ひとり語り」)。

○嶋田豊(哲学者。日本福祉大学名誉教授。故人) 「人間の感性がどれほど人間らしいかということをとともだいじだと考えています。(中略)彼は頭がわるいといわれるよりも、彼はセンスがわるいといわれるほうがずっと人間として恥ずかしいことでしょう」(『嶋

田豊著作集3』萌文社,2000,54頁.初出「人間らしさと文化の問題」1978)。

○**二木立「センスは磨け、しかしセンスで勝負するな」。**二木コメントーこれは私が、今から約30年前(1976年9月12日)に自戒の言葉として、B6判カードに書いたものです。当時私は医学部を卒業して5年目の「中堅医師」でしたが、かつて学生運動のリーダーだった大秀才の先輩医師が、勘の良さだけに頼って、継続的努力を怠り、ほとんど研究業績をあげていないことを反面教師として、こう決意しました。

(2)論争についての自戒…これらは文字通りの「自戒」で、実行できていないものばかりです。「ニューズレター」11号10頁の「自信過剰の戒め」も参照して下さい。

○**桑原武夫(仏文学者)「論争は大いにけっこう。でも、自分が優勢なときほど相手に退路をつくっておいてやったほうがええなあ。**そうしないと恨みが残り、闇討ちにあうかもしれん」(「日本経済新聞」2004年10月18日朝刊。梅棹忠夫「私の苦笑い」より重引。梅棹氏が、25,6歳の頃、学問論争で、相手の逃げ道をふさぎ徹底論破したあとに、桑原氏から諄々と諫められた言葉)。

○**上野千鶴子「相手にとどめを刺しちゃいけません。(中略)その世界であなたが嫌われ者になる。それは得策じゃない。あなたは、とどめを刺すやり方を覚えるのでなく、相手をもてあそぶやり方を覚えて帰りなさい。(中略)議論の勝敗は本人が決めるのではない。聴衆が決めます。**相手をもてあそんでおけば、勝ちはおのずと決まるもの。それ以上する必要も、必然もない」(遙洋子『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』筑摩書房,2000,15頁より重引)。

○**司馬遼太郎「竜馬は、議論しない。議論などは、よほど重大なときでないかぎり、してはならぬ、と自分にいいきかせている。／もし議論に勝ったとせよ。／相手の名誉を奪うだけのことである。通常、人間は議論に負けても自分の所論や生き方は変えぬ生きものだし、負けたあと、持つのは、負けた恨みだけである」**(『竜馬がゆく(3)』文春文庫、伯楽の章、245頁)。**二木コメントー**私はこの言葉を、谷沢永一『論争必勝法』(PHP出版,2002,258頁)で知りました。この本の最終章「論争に必ず勝つ方法18章」の(18)社会人になって職場に身を置くようになったら論争してはいけない(論争は書生の遊戯である…)の最後に書かれています。

○**パスカル「人を有益にたしなめ、その人にまちがっていることを示してやるには、彼がその物事をどの方面から眺めているかに注意しなければならない。なぜなら、それは通常、その方面からは真なのであるから。そしてそれが真であることを彼に認めてやり、そのかわり、それがそこからは誤っている他の方面を見せてやるのだ。彼はそれで満足する。なぜなら彼は、自分がまちがっていたのではなく、ただすべての方面を見るのを怠っていたのだということを知るからである」**(前田陽一・由木康訳『パンセI』中公クラシックス,10頁)。

「二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター（2005年16号）」（2005.12.1）より

3. 私の好きな名言・警句の紹介(その12)ー最近知った名言・警句

※補足：7号7頁で紹介した、**グラムシ「知性の悲観主義、意思の楽観主義」**の出所を、本学経済学部の丸山優教授・学部長に御教示いただきました。この言葉は、グラムシの『獄中ノート』や『獄中書簡』に繰り返し出現するが、『獄中ノート』第9巻第60節（原著）での文脈で理解するのが適切とのことです（その一節の日本語訳も教えていただきましたが、略）。竹村英輔（元・日本福祉大学教授。故人）『現代史におけるグラムシ』（青木書店、1989、69頁）には、別の個所（ノート番号28覚え書き番号11）の同じ言葉が引用されています。

○尾辻秀久（前厚生労働大臣）「ある先輩の言葉だが、人間は性善説でも性悪説でもない。性弱説である。人間は本来弱いものであるの、その弱さに負けないように、がんばらないといけないし、弱い人間同士だから、助け合っていないといけない。思いやりも必要」（『週刊社会保障』2005年11月14日号13頁「取材メモ」、『週刊福祉新聞』2005年11月7日号「三念帖」。11月1日の退任時の職員あいさつで、就任時にこう述べたことをあげた）。

○朝青龍（横綱。先場所初日に敗れた普天王を外掛けで破った）「相撲は負けて覚えるもの。勝って覚えることなどない」（『日本経済新聞』2005年11月20日朝刊）。

○青木宣親（プロ野球ヤクルトスワローズ選手。イチロー以来の年間200安打を達成しセ・リーグ新人王に輝いた）「自分へのほうび？考えていません。来年のことしか見てないです」（『しんぶん赤旗日曜版』2005年11月13日）。

○ピーター・ドラッカー（経営学者・思想家。2005年11月11日死去、享年95歳）「暇な時は何をしていますか」と尋ねられれば、逆に「暇な時とは一体なんだね？」と聞き返した（『日本経済新聞』2005年11月12日夕刊。牧野洋「評伝」より重引）。「私をエコノミストというのは誤解もはなはだしい。エコノミストは数字ばかり見るが、私は数字より先に人を見る」（『日本経済新聞』2005年11月13日朝刊。小島明「ドラッカー氏を悼む」より重引）。

○大江健三郎（作家。最新作『さようなら、私の本よ！』を語って）「僕は最悪の事態を恐れながら、なお人間は回復するという考えを書いてきた。生死ぎりぎりまで追い詰められたところで人間は抵抗して生き抜いている。小説とはそういうものを信じて、生死ぎりぎりの分かれ目を書くものです」（『朝日新聞』2005年11月9日夕刊）。

○小池民男「彼〔サルトル〕は言葉という武器で戦った。ボーヴォワールによれば『サルトルは書くためにのみ生きていた』」（『朝日新聞』2005年11月7日朝刊「時の墓碑銘ー人間は自由の刑に処せられている J・P・サルトル」）。

二木コメントーこの2人の言葉は、「ニューズレター」11号（12頁）で紹介した、工藤晃氏の「書くこともたたかいだ」に通じると思います。大学院の教え子から、また「団塊の世代的発想」と笑われそうですが…。

○フジ子・ヘミングウェイ（ピアニスト）「確実に弾くのがいい演奏とは思わない。間違

ってもいいから、他人に弾けない演奏をしたい」。(豊田泰光氏が、次に紹介するエッセーの冒頭で、「ある番組で語っていた」言葉として引用)。**二木コメント**—豊田氏は、これが自己の野球観にも通じると述べた上で、次のようにその「前提」にも触れています。

「ただし、自分の色を出したいといっても、気ままに演ずるだけなら独善の演技、スタンドプレーで終わる。音楽でも野球でも一定の基礎を前提とするのは言うまでもない」。

○**豊田泰光**(野球評論家)「『ここぞ』で強い人・弱い人—勝負強い人は[野球の試合で]大差の終盤、つまりどうでもいい場面では平気で凡退するが、勝負弱い人はいつでも手を抜かない。まじめではあるが、**集中力のメリハリ**がない。／また勝負強い人は『どうやったら打てるか』と考えるのに対して、勝負弱い打者は『なぜ打てないのか』と打席に立っても悩んでいる」(「日本経済新聞」2005年11月3日「チェンジアップ」)。**二木コメント**—この言葉を大学院の「医療経済学」講義の冒頭で紹介した後に、院生に「勝負強い人」か「勝負弱い人」かの自己評価を挙手で聞いたところ、日本人院生の多くが「勝負弱い人」に挙手したのとは逆に、外国人留学生(韓国・中国人。全員女性)の大半は「勝負強い人」に挙手しました。さすがに、「海を渡り、空を飛んできた」人々は根性が違う!

○**衣笠祥雄**(野球解説者)「**監督やコーチは選手をある程度のレベルまで鍛えられるが、最後の『たくましさ』を作るのは、多くの場合修羅場だ**」(「朝日新聞」2005年10月28日朝刊「鉄人の目」。日本シリーズでロッテが阪神に圧勝した理由に触れて)。**二木コメント**—「修羅場」は、黒川清氏(学会会議議長)が医師・研究者に勧めている「他流試合」に通じると思います。研究者の卵(院生)にとっての最初の修羅場・他流試合は、学会報告とレフェリー付きの学術雑誌への投稿とも言えます。

